「――となり、この式を単位時間tで微分すると――」

教壇に立った物理教師がなんとも気の入らない声で説明をしていた。その声につられてか、沈没船が何隻も出来上がっている。教師は教師で、それに気付いていても咎めようとはしない。

その中、僕も真面目に授業を受ける気がしなかった。かといって眠気もないので、こうして窓の外の世界を見つめている。

世間は十一月の終わり。纏う衣がなくなった裸木が哀愁を誘っていた。よく見ればスズメバチの巣があったりして、春、夏に何もなかったのが不思議なくらいだ。

視線を黒板に戻す。癖のある字が占領する板を見つめ、ノートに写し始めた。昼休みが直ぐそこまで迫っていた。

チャイムとともに教師は授業終了を告げた。週番の合図で礼をし、教室に喧騒が溢れ出した。変わらず寝続ける者。友人と話に花を咲かせる者。財布を握り締め、死地（学食）へと駆け出す者。弁当を取り出しつつ、勉学に励む者。実に多種多様だ。

かく言う僕は財布を持って購買へと向かった。殺人的な人ごみを有する学食とは違い、購買はそれほど混まないのでお気に入りだった。

購買に着くと、やはり混んでいない。目当てのパンを繕って購買を後にした。ヨーグルトパンとスープパン。明らかにイロモノ系のパンだ。だが、これが美味いのだ。ファンも少数だから確実に調達できるのもポイントが高い。

自販機でマックス甘いコーヒーを買い、階段を登る。冷えた空気を押しのけるように進む。

特別教室がある棟の一番上。屋上――の手前、その踊り場が僕のお気に入りの場所だ。誰も来ない、騒ぎ声も聞こえない。本当に静かな場所だ。

一部は物置とされているようで、要らない机と椅子が運び込まれていたりするので、席には事欠かない。

早速手前にあった椅子の椅子を引いて腰掛ける。机の上に先ほど買ったパンと飲み物を置いた。

ふと、横を見てしまう。今座っている机の隣。そこにももう一組机が置いてあった。多少誇りを被っているが、それでも他のと比べればかなり綺麗だ。

――あれから、もう一年が経つ。

感慨にふけてしまった。らしくない、と頭を振った。僕がそんなこと考えることは許されない。

もう一度頭を振ってパンの包装を解き始めた。

「やっぱりここにいたのか」

不意に声が届いた。声の方向を見ると、茶色の髪の毛をした生徒が上がってくるところだった。左耳にピアスが光っていた。

「探したぜ」

「探したってほどじゃないと思うけど」

「まあ、啓介が昼休みに行くところっちゃ、購買かトイレかここだもんな」

言いながらさっき見ていた机にどかっと座った。

彼は横井浩平。制服を着崩すわ髪を染めるわピアスをするわの不良の代表格だ。そんな浩平と僕が仲が良いと言うのは、人生何が起こるか分かったものじゃない。

浩平は自分のポケットを探り、箱状の物を取り出す。

「校内禁煙だよ」

「ちぇ、固いなぁ」

渋々それをポケットに戻す。ま、こういったことは日常茶飯事だし、驚くことはない。そりゃ、付き合い始めの頃は驚いたものだったが、もう慣れてしまった。人間は順応する動物なのだと悟ったのもその時期だ。

「で、浩平は何の用で？」

「そうそう、ちょっと教えて欲しいんだよ」

机の上にそっと出される。本だ。表紙にはこう書いてある。

――物理Ⅱ――

「物理か……どこら辺？　章によっては答えられないけど」

「電磁気のところ。得意だろ？」

「得意ってか、点数取りやすいだけだよ」

「それでも解けるんだろ？　だったらいいじゃん」

「仕方ないなぁ。で、電磁気のどこよ」

「ここ」

教科書のページを開き指差す。ちょうどそこは自分の理解の範疇に入っていた。

「ああ、ここはね――」

僕は浩平に説明を始めた。

横井浩平。見るからに不良の彼と僕が出会ったのは、去年の夏休み前だった。出会いはいつも突然、とは言うけど、僕達はまさにそうだった。

最初のきっかけは何だったんだろう。とりあえず、僕は浩平に話しかけられたのが始まりだ。

「よう。アンタ、後藤啓介……だろ？」

教室にずかずかと入ってきて、急に声を掛けられた。それだけで驚きものだ。

「え、あ、はい」

声の主を見ると、悪名高い不良がそこにいた。いや、悪名、というのはどうだろう。結局彼は何も事件を起こしてないし、問題も起こしてはない。ただ、普通に外見がアレなだけだった。といっても、当時の僕にそれが分かるわけもなく、背筋を伸ばして浩平と対峙する羽目になった。

「ちょっと用事があるんだ。こっち来てくれ」

「え？」

僕の返事も聞かずに僕の手を取って浩平は教室から廊下、階段へと連れまわす。そして最後に到達したのは、図書室だった。

「風の噂で聞いたんだが……後藤、期末良かったらしいな」

「え、あ、まあ」

浩平を目の前に肯定とも否定とも取りにくい返事を返すしか出来なかった。だが、彼はそれを肯定と取ったようだ。

「そっか。そこで頼みがある」

「へ」

「俺さ、見たまんま成績悪くてな。夏休み補習がある」

「はぁ」

「それで、頼みがあるんだ」

まさか変わりに受けろとか、そういうのじゃないだろうな。そう思って少々身構える。だが、続けられた言葉に肩の力を抜けさせられた。

「勉強を教えてくれ」

「は？」
「だから、勉強だよ」
「あ、ああ。なるほど」
「悔しいことに俺は後藤に何も出来ることはない……虫のいい話かもしれないが、この通り」
がばっと腰を折る浩平。流石に人の少ない図書館と言えども、普通の生徒相手に不良が頭を下げる姿は明らかに人の目を引いていた。
「ちょ、横井君――困るよ」
「ダメ、なのか？」
「ダメと言うか……目立ってる」
「……ごめん」
そう、この一言だ。この一言で直感したんだ。浩平はいいヤツだって、そう思った。
それから放課後に勉強を教えたり、夏休みは遊んだりした。僕の直感は当たっていて、浩平は身なりは不良っぽいけど、中身は単純にいい人だった。
勉強が進むに連れて、浩平は次第に勉強にのめり込み始め、なんと三学期の期末テストでは最下位層から中間層へと大きく変貌を遂げたのだ。
それからと言うもの、勉強にすっかりはまり、こうして僕の元へと質問に来るのだ。ちなみに今の浩平は中間層から上位層へとくい込み始めている。教えている側としても大変うれしい結果だ。

「――ってこと。大丈夫？」
「ああ、なるほどなるほど。変に覚えてたよ。これでやっと問題が解ける」
満面の笑みを浮かべる浩平。この笑顔が凄くうれしい。
「浩平って、ほんと勉強好きだね」
「ははは、啓介ほどじゃないって」
「僕はそんなにしてるつもりはないんだけどなぁ」
「この、成績上位者が何を言いますか。この前のテストも十位以内入ったんだろ」
肘でわき腹を小突いてくる。
「うわ、バレてた？」
「バレバレだよ。啓介の名前は良く出るからな」

うりうり、とさらにわき腹に肘を入れてくる。
「ちょ、そんなに――ん？」
視界の端に、何かが映った。だが、それは一瞬で、判断する前に消えてしまった。
「どうした？」
「誰かいたような気がしたんだけど……気のせいかな」
「気のせいだろ」
もう一度そこをちらりと見て、それから浩平と話に花を咲かせて昼休みを過ごした。

「好きです。付き合ってください」
月並みな台詞。それが響き渡ったのは、冬休み間近で閑散とした廊下だった。日は沈みかけ、リノリウムの床が朱に染まる。場所は――物理室の前だったような気がする。あまり良く覚えてないのは、その時の僕は気が動転していて頭が上手く回らなかったからだ。
相手はクラスメイト。クラスの中では落ち着いた印象のある子で、影の薄い僕とどこか似ている人だった。と言っても僕の場合は影の薄い、と言うよりは浩平の友人と言うことで多少距離があったのかもしれない。どちらにしろ、関係ないことだ。ただ、彼女はそんなことを気にせずに話しかけてくれる、変わった人だった。
部活が休みでぶらりと二人で歩いていた最中での出来事。予想もしなかった言葉にパニックを起こしかけた脳で僕はなんと答えたのか。今考えても、気の利かない言葉だ。
「僕は……嫌いじゃない」
それはどっちに聞こえただろうか。肯定か否定か。ただ、潤いを帯びた瞳が夕日で光っていた。
「ただ」
接続詞。暗に否定を示唆する単語。それを耳にした彼女は目を見開いた。それを見て、それでも僕は続けた。
「まだクラスメイトとしてしか見ることが出来ない」
瞼を閉じて声にならない嗚咽を漏らす。それでも、それでも僕は続ける。
「けれども、これから好きになることは出来る。まだそんな風に見れないけど、それでもいいのなら。僕なら、喜んで」
その瞬間、大粒の雫が彼女の頬を伝い落ちた。床に出来た小さな小さな水溜り。
「う、ぐすっ……」

溜まった涙を少し乱だけ暴に拭う。ウサギのように真っ赤になった瞳で僕を見て、そして震える声で小さく微かに。

「ありがとう」

その言葉は一年が経った今でもこの耳に焼き付いている。

もう受験間近の僕は部活を引退している。しているはずなのに、どうしてここにいるのだろうか。

「後藤先輩？　どうしたんですか？」

「あ、ああ、ちょっとボーっとしてた」

「ちゃんと射を見てくださいよー」

グラウンドの隅っこにある弓道場。そこで僕は現役の部員に混じって部活をしていた。と言っても引退している身ではあるので見るに等しいけれど。なんとなく気が向いてここに訪れた次第だ。

「先輩は引かれないんですか？」

「ん、ちょっとね」

今は弓を引く気分じゃない。だけど、ここにいたい。居場所が有るような気がするから。

目を細めて的を見る。遥か２８メートル先のそれは動くことなくそこにあり続ける。動くのは弓を引く人間だけ。敵は、いない。それが他の武道にはない点だ。つまりは、己のみが中り外れを左右できる。それ故に、自己鍛錬に優れた武道だと思う。いい加減な気持ちで引けばいい加減な結果が帰ってくる。そんな世界だ。こんな淀んだ気持ちでは、結果は分かりきっていた。

練習終了まで道場に居たかったが、浩平から呼び出しを受けたので先に失礼して道場を出た。場所はいつもの喫茶店。駅前通りから一本路地に入ったところにあって、静かな場所だ。ここは浩平のお気に入りの場所だ。

カランカラン。

「いらっしゃいませ」

入り口の扉を音を鳴らせて店内へ。窓際の角。いつもの定位置に浩平はいた。

「こっちこっち」

静かな店内にそぐわない大きな声にマスターと一緒に苦笑して向かった。

「どうしたの？」

また勉強だろうか。
「いんや。偶には啓介と遊ぼうと思ってな」
「遊ぶって……僕以外に友達はいないの？」
「いたらとっくに声を掛けてるよ」
ぶすっとした表情を作る。
そう、浩平に友達はあまりいない。形（なり）はこんなのだし、最初はそっちのほうの友達はいたらしい。けれど、勉強を始めてから一人、また一人と彼の周りから消えた。結局残ったのは僕を含めた数人だけだった。
「ま、新しくつくろうとも思わないしな」
今度は太陽のような笑顔を浮かべる。こうした表情は人懐っこいもので、どうして友達が出来ないのか不思議だ。少なくとも、僕よりは多くても不思議ではないのに。
「彼女も？」
「そういうものは必要になったら出来るもんだよ。今は必要ないね」
と言うことはいないらしい。顔はいいのだから居てもおかしくないと言うのに、この人。まだ一度も彼氏彼女の関係になったことがないというのもまた驚きだ。風の噂ではホモって話もあるくらい。
「言っておくけど、ホモじゃないぞ？」
「わかってるって」
「ただのゲイなんだから」
「浩平、今までそれとなく楽しかったよ」
席を立つフリをする。
「ちょ、冗談冗談」
「分かってるよ」
本当、分かってる。いつもの掛け合いに苦笑しながらマスターがコーヒーを持ってくる。何も言わずともいつものを持ってきてくれる。もう僕もこの店の常連だった。
「ありがとう」
「ごゆっくり」
簡単な挨拶をしてマスターはカウンターへ引っ込んでしまった。あれでもこっちの話には耳を傾けていて、僕達の話に突っ込んだり助言をくれたりしてくれる頼もしい人だ。肩書きは帝大理系卒で、どこぞの研究所で研究職についていたという。それが今や、コーヒ

ーのブレンド研究に凝っているのだからこの世の中何があるのか分からない。
「それで、どこに遊びに？」
「そうだな……」
「決めてなかったの？」
呆れた表情を作る。浩平が決めてないのはいつもの事だけど、毎度毎度決めてから呼んで欲しいと思っている。思っているだけで言いはしないのだけど、多分僕がこの空気が好きだからだと思う。
「ま、通りに出てから決めるか」
「いつもそれだなぁ」
いつものこと。そんないつも。浩平の行き当たりばったりさに、やっぱり僕もいつものように苦笑した。コーヒーを飲み干し、五百円硬貨をそれぞれ一枚ずつをテーブルに置いて店を出た。
繰り出した街は紅く染まり始めていた。通りに沿った店々は我先にと電飾鮮やかに輝かせる。特有の眩しさに目を細めて浩平を見る。浩平も少しだけ目を細め、若干ながら眉を顰めていた。
「どうする？」
「どうするかなぁ……まあ適当にぶらぶらと」
「ぶらぶら、ねぇ。毎度それじゃつまらなくない？」
「つっても、他にすることがある訳じゃなしに」
「勉強しなさい、勉強」
「それはそれ、これはこれ」
「ま、別にいいけど」
浩平の成績なら問題はないだろう。素行の問題で国立は難しいけど、私立なら大体のラインは余裕だ。素行の問題といっても、浩平は遅刻はしないし、サボリもしない。実に真面目な生徒と言ってもいいだろう。彼の場合はその容姿。染まった髪、だらしなく気崩した制服。左耳にはピアス。教師が不良と認定するには十分たるものだったようだ。
僕はと言えば、浩平の逆だ。制服はだらしなくなる手前で着ているし、髪も染めていない。ピアスだってしていない。遅刻は……あまりしない。欠席もあまりしない。サボりもあまりしない。考えようによっては、僕のほうが素行に問題があるようにも見える。けれど、浩平があまりにも目立ちすぎて隠れてしまう。そういう意味では僕は浩平を隠れ蓑に

していないとも言い切れない。けれど、そんな面一切抜きに、友達をやっていたい。それが本心だ。
「カラオケでも行く？」
「ん、別にいいけど、二人だけで？」
「……それもそうだったな」
時間的にもうすぐ夜。その中を男二人がカラオケに入る、というのは如何ともし難い状況だ。
「じゃあ、ゲーセンで」
「まったく、いつも通りなことで」
「その台詞もいつも通りなことで」
僕達は軽く笑って、駅近くのゲーセンへと足を進めた。
学生服が席の大半を占めるそこで僕はベンチでボーっと座っていた。するゲームがあるわけもなし。ただ、こうして他人のプレイや浩平を見ていたりするだけで満足だった。ゲーム筐体が響かせる重低音にボタン音、激しい曲調のＢＧＭがごたまぜになった奇怪な音楽。それが耳を塞ぐ。
自ら耳を塞ぐ必要性のない空間。他人とコミュニケーションを取るには大きな声――つまり、明確な意志があり、伝える覚悟が必要とする。一人になる空間には最適なものだと言えよう。
「よし、三人抜き」
浩平が小さくガッツポーズをした。浩平は対戦格闘ゲームをしていた。
「お、頑張ってるね」
「まあね」
三人目が席を立つと即座に四人目が乱入する。対戦台ならではの光景だ。浩平は乱入者に驚きもせず淡々と自身のキャラクターを動かす。そして淡々と負けた。
「相手、強いな」
「そうだね」
それだけで会話が終わり、浩平は次の人へと席を譲る。そのまま僕の横に腰を下ろした。
「喉渇いた」
「買えばいいじゃん」
「高いんだよ、こういうところは」

そう言って力なく笑った。それを見て僕も力が抜けた笑いを返した。
「分かってても、やっちゃうんだよな」
惰性。そんな単語が脳裏を掠めたが口にはしなかった。どうせ、浩平は分かっている。そんな気がしたから。
「啓介はやらないのか？」
「うん、見ているだけでいいよ」
「とか言って、本当はないんだろ？」
人差し指と親指でわっかを作る。
「あははは、そんなところ」
ほんの僅かだけ、肩を竦めた。居心地が悪い気がして、立ち上がり歩き回った。興味もないゲームを見て、興味もないクレーンの景品を見て、興味のないメダルの景品を見て。さして興味のないゲーセンの探索は早くも終わりを告げ、浩平の横に再び腰を落ち着けた。
「なんかいいのでも見つかった？」
「いんや」
浩平はいつの間にか缶ジュースを持っていた。
「買ったの？」
「誘惑というものは勝てないから誘惑なんだ」
惑わすから、の間違いだろう。だけど指摘する気力も湧かない。余っていた気力は全て浩平への罵倒とジュースの奪取に使った。
「違う、バカ。もらい」
「三単語！？」
驚いている隙に二口だけ貰う。無果汁なのにオレンジ味、その化学じみた甘ったるさがどこか懐かしくて美味しかった。炭酸を鼻から吐き出すと、少しツンとした。
「無気力だな」
「そう見える？」
浩平は小さく頷いた。人に気力のない姿は見せないように心がけていたつもりだったが、浩平には見極められていたようだ。大した観察眼。素直に感心してしまった。
「ああ。今日は特に。何かあった？」
「んー。ちょっと鬱が入っているだけかも」
「そっか。ヤバかったら病院いけよ」

「ん、分かってる。けど、思うわけだよ、浩平君」
「どうした啓介君」
「鬱の人は、自分から病院には行けないと思うんだ」
「……帰ろうか」
「突っ込みもなしに？」
「生憎、俺の力量じゃそれを生かしきれる突っ込みは出来ないんで」
缶の残りを一気に飲み干し、帰り際にゴミ箱にそれを入れていた。
街はすでに夜と化していた。電飾が目に痛いほど輝いていたがゲーセンのほうがよっぽど光っていて、それが眩しいとは思えなかった。目を細めることもせずに、ただ日々冷たさと鋭さを増す空気に呪いを篭めてため息を吐いた。
「啓介、明日は？」
「勉強か部活」
「ははん、いつも通りだな」
「そういう浩平は？」
「勉強か遊び」
「ははん、いつも通りだな」
浩平に同じ台詞で返すと悔しそうな顔をしていた。基はといえば、浩平が僕と同じような答えをしたのが悪いと思うのだ。よほど鈍感でない限り、それは前フリだとしか捉えられないというのに。
「今日はここら辺でお開きにするか？」
二人して歩いていると駅まで来ていた。僕はここから二駅下り、浩平は一駅だけ登る。つまり、ここが僕達の別れの場所であった。
「そうだね」
「時刻表はっと……あ、そろそろだ」
「それじゃ、行こう」
僕と浩平は駅の構内に入るよりも早く定期券を出し、改札へと早足で歩いていった。
浩平の言ったとおり、ホームに出るとほぼ同時に上り電車が滑り込んできた。僕の待つ下り電車はあと十分ほど待つ。電車の前で軽く別れの挨拶をして浩平は乗り込んだ。それを見送って、僕は下りのホーム、浩平の電車の反対側で電車を待っていた。
ゆったりとした時間。自分の吐き出す白い息を見つめて物思いに耽る。どうして今日は

こんなにも思い出してしまうのか。不思議で仕方ない。普段意識もしないことが、急激に意識しているという自己への違和感。拭い去ることの出来ない汚れのように心の底で固まっている。染み付いたら、最後。そういうものかもしれない。

一人でいるとどうにも変な風に思ってしまう。単に自意識過剰かもしれない。しっかりしろ、とかぶりを被る。

「何してんの？」

「……須藤さんか」

「当たりー。というか声で分かりなさい、声で。この美声で」

「どの口が言ってるのでございましょうなぁ」

「あらー、あなたの目は節穴か飾りなのかしら」

「……よう」

「久しぶり」

軽い応酬があって、それからやっと挨拶に移る。いつの間にか出来た、僕と須藤さんとの暗黙のルールだ。

「何してたの？」

「何も、ボーっとしてた」

あ、そ。僕にだけ聞こえるような小さな声で呟いた。それから改めて横に並ぶ。

「いつもこの時間使ってるの？」

「ん、まあそうかな」

「ふーん。私はさ、今日友達に相談されて遅くなったんだけど、そっちは？」

「僕は遊んでた」

「余裕ね」

「そんなには。でも息抜きは必要だから」

「確かに」

そこで会話が途切れた。

須藤理。理（ことわり）と書いてアヤと読む。初見では絶対に読めないだろう名前の持ち主。こうして横に並べば分かるけど、僕とそれほど大差ない。若干僕のほうが高いくらいで――つまり女子の中では高いほうだ。これでも僕は平均身長にほんの少しだけ足りないくらいの持ち主なのだ。さっぱりとした性格を現すようなショートカットに飾らない言葉。気持ちいいほどに付き合いやすい人間だ。少なくとも、僕よりは。

「何？」
「い、いや。何も」
いつの間にか彼女をまじまじと見てしまっていたようだ。
「あ、そ」
またもそう呟いた。癖のようなものだろう。
「そうそう、ケースケ」
「何？」
「今日された相談事なんだけどさ」
「僕に言っていい内容なの？」
「ん、まあ名前出さなければ大丈夫でしょ」
「たしかにそうだけど」
「それでさ、恋愛相談なんだけど」
「パス」
「決断早いね」
「専門外」
「いやいや、男の視点から見て欲しいわけ」
「はぁ」
思わずため息。街の空気に消えろ。
「んで、何さ」
仕方ない。どうせ聞かせて来るのだろう、それなら自分で聞いたほうが幾分気持ちがいい。少しだけ肩を落として聞く姿勢を作った。
相談内容はこうだ。告白したい人がいる。けれど、その人を本当に好きかどうか分からない。最後の一歩が踏み出せないでいる。そんな感じだった。
「で、ケースケ的にはどうなのよ」
ゆれる電車内。僕はドアに寄りかかり、須藤さんは目の前で吊革を掴んでいた。
「簡単、告白すればいい」
「それが出来ないから言ってるんでしょ」
「告白できないっていうことは、それまでの気持ち。明確な一線があるってこと。自分の感情が、その一線を越えられるか。それも告白の一つじゃない？」
「……まぁ、確かにそれはそうなんだけど」

「本気なら、そんなことなりふり構わず告白できると思う」
「……うん、ありがと。参考にしとくね。けどさ、なんかその答えが妙に手慣れてるんだけど」
「受け売りだからね」
「へぇ」
誰の、とは聞かない。そこが彼女のいいところ。思えば、僕の周りにいる人は深く詮索しない人ばかりだ。多分、自然と僕が選り好みをしてしまっているのだろうけど。そう考えると、残酷、なんて言葉が見えてきそうで、早く駅に着かないかと願ったりした。

どうして僕なのか。そう問いかけたことがあるいつに日だろう。お互いのぎこちなさがなくなりかけた時期だったはず。多分、春の手前、春休みごろだ。
「いきなりどうしたの」
「なんか、聞きたくなって」
最初のほうはお互いぎこちなさでいっぱいいっぱいだった。それがほぐれてきて、やっと聞けた。そういえば、街のどこかだった気がする。
「好きだったから、じゃ理由にならないかな？」
顔を赤らめて言う。好きだった、その部分だけ声量が落ちて、そこが可愛らしい。
「んー、例えば何処とか」
「クラスに私と雰囲気が似た人がいて、目で追ってたら、かな。最初からどことかそういうのはなかったよ」
「そういうものなんだ」
「うん、そういうもの」
微笑んだままストローを咥えてアイスコーヒーを啜る。長くなった髪の毛が入れないように、片手で髪を押さえる仕草も心に少しだけ響く。それから気付く。
ああ、この人の一挙一動に凄く心が動かされていると。
思い出した。その店は、あの店だ。浩平と僕の行きつけの店。最初は僕が常連で、彼女と来るようになって、それから浩平が来るようになったんだっけ。
「特別な関係、か。何していいのか分からないや」
小さく呟く。すると彼女は笑って言った。
「私も」

遊びに行くのも友達同士でやるわけだし、何を以って特別か。よく分からない。手を繋げばいいのか、キスをすればいいのか、抱きしめればいいのか、その先に行けばいいのか。本当に良く分からない。

「ここのコーヒー、美味しいね」

「うん、僕のお気に入り」

「そっか。それじゃ、私もお気に入り」

屈託ない笑顔。宝石のように輝いていた。いつもいつも、彼女は笑っていたのだ。

だから、急に話が変わるときが分かりやすい。

「あのね、啓介君」

「なに？」

「私ね、その……告白、したでしょ？」

告白、の部分だけトーンが下がる。恥ずかしいのだろう。そこがイジらしい。

「あのね、その時は、私が本気かどうか迷ってたの」

「迷ってた？」

「うん。でもね、こう思ったの。出来たら本気、出来なかったらそうじゃないって」

「うん」

「ほら、私こういう性格だから。なかなか覚悟が出来なくて。でも、そんな私が覚悟できれば、って思って」

「――凄い」

「そ、そうかな」

顔を更に紅く染め上げて俯いた。意味もなく、中身のないアイスコーヒーを啜っていた。

「そういう考え方、僕は好きだな」

「……ありがとう」

そうだ。その後になって、自分が彼女に向かって初めて好きって単語を使った瞬間って気付いたんだ。遅すぎたような気もする。そこまで、僕も迷っていたのだろうか。

僕達は、似ていたのだから。

須藤さんと別れて家路を辿る。街灯で伸びる影は薄気味悪く、前だけを向いて歩く。空気の色は、灰色。くすんだ、夜の闇が靄で包まれた、灰色。不安になる、灰色。

十数分で自宅にたどり着くと、いつもの日課を適度にこなし、眠りに着いた。寝苦しい

こともなく、すんなりとした寝入りだった。

終業式が次の日に迫った日の昼休み。やはり僕はいつものようにいつもの場所へ向かっていた。手に昼食を持って階段を登る。屋上への踊り場。机椅子の物置。お気に入りの場所。

いつもは無人のそこに、今日は人影が見えた。屋上へと続く扉から覗く太陽が逆光で上手く見えない。ただ、その人だけがすっぽりと黒い形を作っていた。

誰だかわからないけれど、戻ったほうがいいだろう。先客に場所を譲るように、階段を登っていた足を止めて身体を反転させる。

「あ」

後頭部に声が突き刺さる。か細い声で、やっとあの人影が女の子であることがわかった。けれど、立ち止まる勇気もなく、聞こえないフリをして僕は階段を早足で降りた。

「……」

僕を捕らえ続ける視線がただ只管に痛かった。

雑踏のような廊下を抜けて自分のクラスに戻る。ここで昼食を食べるのは久しぶりだった。

「遅かったな」

「……なんでいるの？」

僕の席には浩平が座って昼食を食べていた。多分、今日は自作の弁当なのだろう。お世辞にも綺麗とはいえないおかずが弁当箱の中でひしめき合っていた。

「そら、お前とメシを食いたかったからな」

「はぁ、もういいよ」

何がいいのやら、と呟く浩平の前に座る。本来僕の席ではないものの、今はいないようなので椅子を拝借した。そんな様子をクラスの面子は慣れたものの、今だ好奇の線を持つ目で視ていた。

「で、本当にどうしたの？」

僕は無視して口を開く。

「ああ。実は――って、今日はゲテパンじゃなかったのな」

「今日はあんこの気分」

あんぱんを浩平の前で遊ばせた。

「ふーん」
「で、実は、何なのさ」
「ああ、そうそう」
思い出したように喋り出す。つい数秒前のことを忘れてしまう友人の頭の中身を少々疑ってしまった。
「まあ、こういうわけで、勉強を教えて欲しいわけだ」
「どういうわけなのか知りたいところだけど敢えて何も言わないよ。でも、それはいつものことだろ？」
僕が言うと浩平は若干蔑んだような顔をした。
「は、これだから成績上位者は違うねぇ」
「いきなり『こういうわけ』で分かったらエスパーだと心底思うよ」
「ちっちっち」
舌打ちと同時に指を振る友人。思わず冷たい視線で見てしまった。
「分かってないねぇ。いい、明日はなんなんだい？」
「明日は木曜日だね」
「……天然？」
「心外だ」
「んじゃ、真剣に答えること」
「はいはい」
「なんだー、その仕方ないなぁって顔は」
「分かってるじゃん」
「な、なんだとー」
いきり立って、立ち上がった浩平に釣られて僕も立ち上がった。
「やるのか？」
「……ま、それはさて置き、明日は？」
見事に流された。浩平が座り、僕も再び椅子に戻るといつの間にか集まっていた視線が霧散した。
「明日は終業式」
「そう、明日は終業式。そうしたらどうなる？」
「冬休みだね」

「そう、冬休み。イッツ、ウィンターバケーション」
「わざわざ英語にする必要はあるの？」
「いや、まったく」
だったらするなよ、という突っ込みは飲み込んだ。この横井浩平という人物は意味もないことが好きなのだ。それが分かってしまっている僕は、それなりにこいつと長い時間一緒にいたことになる。
「で、そのウィンターバケーションがどうしたわけ？」
「いいか、ジャパンのハイスクールにおけるウィンターバケーションは年末年始を挟んでいるわけだ」
「まあね」
「と言うことは、学校ももちろん閉まる」
「当然だね」
「と言うことは？」
「学校に来ない」
さも当たり前の答えを返す。段々と浩平の言わんとすることが分かってきたが、敢えてそれは避けてみる。
「……あのなぁ、啓介。お前は休みの間何をするつもりだ」
「うーん、寝て、起きて、御飯食べて、勉強して、寝る、かな」
「あー、これはまた健康的で模範的受験生なこと」
「受験生だからね」
「……啓介さぁ」
「何？」
「さっきから思うわけだが、遊んでるだろ」
「分かった？」
「ああ。大体、お前が俺をおちょくろうとするときは大体語尾が『ね』になるんだよ」
「あら、よく観察していること」
「嬉かないね。で、ちゃんと答えて」
「はいはい。学校が開かないから勉強を教えてもらう機会がないんだ。冬休み中どこかで勉強をしたいんだけど、いいかな？　ってところでしょ」
「ま、まあそうだな。図星過ぎて気持ち悪いけど」

浩平は明らかに引いていた。僕が言うのは何だけど、浩平は直球で来ない代わりに分かりやすいくらいの回り道をするので図星は簡単に突けるのだ。
「で、どう？」
「僕は大丈夫だよ」
というか、いつも通り。休日に電話が来て、呼び出されることは稀じゃない。つい先週も僕は日曜日に浩平に呼び出されて勉強を教えていた。
「で、それについてなんだが、あの店も年末年始は休業するんだって」
「あ、そうか」
いつも呼び出されていたのは、あの喫茶店だった。あの店が使えないとなると――どうしようか。
「図書館じゃ流石に無理だろ？」
「まあ、うん」
一度二人で行ったはいいが、声を出すのが躊躇われる程の静寂が鎮座するあの空間で勉強を教えるのは出来なかった。受け答えが少量ならまだしも、僕と浩平だと量が多いので周りからの視線が痛く、三十分もしないでそそくさと退散したのはいい思い出だ。それに、あの空気は苦手だ。
「となると、選択肢が限られるわけか」
呟くように漏らすと、浩平は静かに頷いた。
結局昼休みの間では適当な場所が思いつかなかった。明日にもう一度会ってから決めるようにしてその日の昼休みは終わった。僕の手にはまだあんぱんが残っていた。
放課後。何を思ったのか知らないけれど、僕はまたお気に入りの場所に向かっていた。ここ最近ではほぼ毎日行っていた故に寂しくなったのだろうか。自分の感情に答えは出ないものの、そこに行かなければ物足りない感じだけが心に渦巻いていたので更々止まる気もない。
下校する生徒の波に逆らいつつ階段を登る。終業式前日のせいか、心なしか教室に残っている人が多い。日常とは少しばかり違う光景を視界の端に収めつつ三階から四階――屋上へ続くそこに足を踏み入れた。
響き渡る雑踏の声。でも、そこではフィルターが掛けられたかのようにぼんやりとしか伝わってこない。まるで異世界から聞こえてくるような錯覚。ほんの少しだけ現実離れした感覚。それが僕が気に入っている理由の一つだ。

踊り場に差し込む光。やはり昼休みとは日の入り方が違う。そう思いつつお気に入りのあの場所を見上げた。

「あ」

「あ」

声が重なる。

そこには先客がいた。背格好や姿、恐らくは昼休みと同一人物。あの時は逆行で分からなかったものの、今ははっきりと見えた。見えてしまった。

二人とも知り合い、と言うにはおこがましい。かといって友達かと言えばそうではない。そうなれなかった成れの果て。僕はそう思ってる。

知らない人であったら二秒で引き返すことが可能であろうに、それが出来ない。今の僕の足は凍りついたかのように言うことを聞かず、踊り場の床に張り付いてしまっていた。

「えっと……」

上から声が降りてくる。今にも鳴きそうな震えた声だった。

「ごめん」

たった三文字を残して彼女は階段を駆け下りた。僕の真横を通り過ぎた時、その顔はやはり僕の思っていた通りの人だった。

追いかけることも呼び止めることも出来ず、ただその光景を見つめていた。自分の視界から完全に彼女の姿が消える。

「はぁ……」

自己嫌悪を含ませたため息を吐く。そのままへたり込んだ。

「全く……」

お気に入りの場所を見つめる気にもならず、俯いた。

「聖域じゃないってのに」

まだまだ弱い僕は、伝えたい言葉を一人で溢す事しか出来なかった。

最悪だった。

人に知られたくない。そんなものは誰にだってある。ただ、僕達の関係は、人に知らせるべきモノじゃなかっただけだった。

地味な僕と地味な彼女の組み合わせ。お試し期間のような関係。分からないまま付き合うことを教えるのは、なんとなく躊躇われたのだ。だから僕達は約束した。

「ちゃんとした関係になるまで、みんなには内緒」
西日の差し込む階段上。そう約束したのはあの場所だった。机椅子を二セット分取り出して、向かい合う。
机に溜まっていた埃は取り払ってある。ここは、僕のお気に入りの場所だったから。脇に積まれた物のうち、綺麗なものだけを選んで設置しておいたのだ。
殆ど皆無と言うに等しいほど、誰も寄り付くことのない場所。僕らが会うのにこれほど最適な場所はなかった。だから、僕は迷わずここを選んだ。
「いい場所だね」
絹よりもやわらかい笑顔を浮かべる。僕自身が褒められたような気がした。恥ずかしさがこみ上げてきたので、それを見せないように窓の外に顔を向けた。そろそろ沈みだす太陽。もう直ぐ夜になる。その前に学校を出なくちゃ。
「明日、終業式だね」
「うん」
何故か腰を上げる気にはならない。もう少しだけ、もう少しだけ。そう思う自分がいた。
「後藤君は、冬休み、どうする？」
「うーん……勉強、かな」
「あはは、真面目だね」
「そうでもないんだけどね」
「そっちはどうするの？」
「うーん……部屋でごろごろ、かな」
「王道だ」
視線を彼女に戻して笑った。はにかむような顔を見て、思い立つ。
「ね、明日デートしようか」
「え？」
驚きに目を丸くする。僕は恥ずかしさを押し殺して続けた。
「何か予定あるの？」
「う、ううん、全然。全然、ないよ」
「そっか。じゃあ明日、デート。まぁ、デートって程のものじゃいけど、どこか遊びに行こう」
「う、うん！」

校門を出てから携帯を開くとメールが二通届いていた。一通は浩平から。明日どうしようかという内容だった。夜にでも返信しておけばいいだろう。そう思ってもう一通のメールを見る。

須藤さんからだった。話したいことがあるから電話しろと書いてある。なんだろうか。多少訝しがりながらもメモリに登録された須藤さんの電話番号を呼び出し、通話ボタンを押下した。

十回の呼び出し音が鳴って、通じないかもと諦めかけた瞬間に電話が繋がった。

「もしもし？」

「あー、おー、ケースケ？」

「うん、そうだけど。話したいことって何？」

考えたら須藤さんとは学校で話はするけど、こうして電話もメールも殆どしたことがない。

「うん、それなんだけどさー、今何処にいる？」

「校門出たところだよ」

「あ、そうなんだ。じゃあさ、校門前で待っててくれる？　五分くらいで着くから」

「う、うん、いいけど」

「ありがと！」

感謝の言葉を残して須藤さんは電話を切った。

僕は通話記録が写る画面をしばらく見つめ、携帯を仕舞って大人しく須藤さんを待った。五分、と言っていたが果たして何分待つことになるやら。吹き荒ぶ冬の風が身体の芯まで冷やすので、温かいコーヒーが飲みたくなった。

果たして僕の願望は現実のものになった。

「へー、こんな店があったんだ」

いつもの店で僕と須藤さん、さらにもう一名がいつもの席に収まっていた。僕は座るだけでいつものメニューが出てくるので、須藤さんたちだけが注文をしていた。

須藤さんは約束より二分ほど遅れて校門前にやってきた。彼女は一人の女生徒を引き連れていた。開口一番に場所を移してゆっくり話し合いたい、と須藤さんが言ったので僕がこの店に連れてきたのだ。

「……」

マスターは無言で、そして音もなく注文されたメニューを差し出す。
「あれ、ケースケは頼んでないのに出てくるの？」
「まあ、常連だから」
「へぇ、なるほどね。あ、ありがとうございます」
目の前にカフェオレを置かれて慌ててお辞儀をする。
「で、話って何？」
場所まで移したのだ。これは何かあるのだろう。というか、僕のことだ。十中八九で。何故なら、須藤さんの隣――直井千陽がそれを証明している。
直井さんは僕と視線を合わせようとせずに、ただずっと俯いている。会ったときからそうだ。そして、彼女こそ、あの場所で会った人だった。
「あ、そうそう。この子紹介するね。千陽――直井千陽って言うんだけど」
「うん、知ってる」
「そうだと思った」
その言葉で悟った。須藤さんは知っている。僕たちの関係を、恐らく彼女の視点で。一体いつからか、とも思ったが、それは不毛な問だった。意味がない。
「あ、そんなに視線を尖らせなくてもいいから。そういうことじゃないし」
「あ、ああ、ごめん」
自然と目が変わっていたようだ。注意しないと。
「ま、それは関係なしとはいいきれはしないんだけどね、それはあくまでおまけだし」
「おまけ？」
「ま、本題からいこうか」
くいっとカフェオレを煽る須藤さん。その仕草は様になっていたが、次の瞬間には舌を火傷して可愛らしい醜態を晒していた。
「あつつ、猫舌なの忘れてたー」
いい加減本題とやらに入らないので僕はコーヒーをゆっくりと口に含んだ。視線を直井さんに向けると、彼女は俯いたままブレンドを飲んでいた。
しばらくして舌の痛みが取れた須藤さんが話し出した。
「明日から冬休みでしょ？」
「そうだね」
このやり取りは今日で二回目だ。

「で、冬休み明けたらセンター試験まで数週間なのよ」
「うん、勉強しないとね」
「そういうわけなのよ！」
ぐっと身を乗り出した。僕と須藤さんの距離が十センチは縮まったんじゃないだろうか。
「さて、そこの後藤啓介君、期末テストは何位だったかね？」
「えっと……」
記憶の海を探る。別に順位が欲しくて勉強しているわけじゃないので、覚えていない。一桁だったのは覚えているのだが。
「ま、まあ一桁だったかな」
自信なく答えると、須藤さんは顔を真剣にして更に身を乗り出した。
「なんと！　良いとは思ってたけど、それほどとは思わなかった。うれしい誤算だね」
この流れは、分かる。分かりすぎる。この展開は今日の昼ごろに悪友としたはずだ。
「勉強教えろって？」
先手を打つと、須藤さんの顔が途端に崩れた。
「そうそうそうそう！　そういうことなのだよ」
「えっと、先約があるんだけど」
「誰？」
「……浩平」
「あー、あいつね。えせ不良」
やはりここでも不良の烙印が押されているようだった。可哀相な浩平。
「別に不良なわけじゃないし、真面目な奴だよ」
「そうなのかねぇ」
「……多分だけど、須藤さんよりは成績いいし」
「え、マジ？」
目を点にして驚く。
「うん。期末は確か六十位くらいだったよ」
「うわ、私よりも良いし……」
途端に項垂れる。前から思っていたけど、随分と感情表現が豊かな人だ。直ぐに態度と顔に出る。きっと、隠し事も出来ないタイプなのだろう。
「うーむ、先約が、ねぇ」

「そゆこと、交渉決裂ってね」
ぐいっとコーヒーを飲み下す。胃の中で暴れるように熱を出した。
「でも、ねぇ」
須藤さんが怪しげな笑みを漏らす。にたり、と擬音が出そうだ。
「でも、なに？」
「こちらの方が面白いんではなくて？」
「く」
その口ぶりは、全てを知っていると言っていた。面白い、というのも須藤さんだけで、僕にとっては一つも面白くない。直井さんだってそうだろう。
「……いつから知ってた？」
「ふふふ、いつからでしょうねぇ？」
業とらしく窓の外に視線を向ける。この人、僕を完全におちょくるつもりだ。だけど、僕は屈するつもりは毛頭ない。徹底抗戦だ。
「まあ、僕は面白いってだけで勉強する意欲のない人を教えるつもりはないよ」
「じゃあ、意欲が私じゃなくて千陽にあったとしたら、教えてくれるってことだよね」
しまった、墓穴だった。
「え、あ、ああ」
動揺を隠せないまま返事をする。どうにかして断る口実を作らなくては。必死の思いで模索し、ある結論を出す。隙を見て、携帯を取り出し、テーブルの下でメールを打つ。
「ね、千陽。意欲は有るんだよね？」
「え、あ」
返答に戸惑っている。よし、まだまだ。時間を稼がなくては。
「ほら、直井さんが返事に困ってる」
言いながら、手元の携帯に返信があった。さりげなく見る。本文から察するにかなりの奇跡。指を加速させて返信する。
「ちょ、千陽？」
須藤さんは直井さんに顔を近づけてなにやらしゃべっている。小さな声ながらも、単語の断片が耳に届く。
僕はそれを拾うよりも、救世主が現れることを願っていた。早く来い、横井浩平。女子の相談が早く終わるか、奴がくるか。いや、前者なら時間を稼げばいいだけの話だ。

「……ってことなのよ？」
「え、でも……」
「だから……」
相談は終わりそうもない。この賭け、僕の勝ちだ。そう思った瞬間、確信へと変わる音が店内に響いた。
ほぼ無音ともいえる空間を貫く音はドアベル。歓喜した気持ちを無理やり押さえつけてゆっくりと見る。
「よお、取り込み中か？」
浩平は片手を上げて挨拶をしつつこちらに来た。今までの中で一番浩平に助けられたと思った。
「ん、そんなとこ」
「で、その羨ましい状況は啓介を取り合う二人の女と女？」
断りもなく僕の横に座る。そのせいで僕が奥に移動しなければならず、須藤さんから直井さんの対面になった。
「まさか」
寧ろ取り合うのは浩平だ、とは言わなかった。
「あれ、不良？」
「どーも、不良でーす」
「これがねぇ……」
須藤さんは値踏みするような目つきで浩平を見る。如何なる欠点も見逃しませんといった感じだ。
「しかし、感じ悪いよ。そういきなりじとりと見つめてもらっちゃ」
「あら、失礼したわね」
須藤さんは目を戻す。一通り見たのか、言われたからなのか、僕には分からなかった。
「で、今どんな状況なのかね？」
「うん。実はね――」
僕は今の状況を掻い摘んで説明する。二人の紹介も兼ねて説明すると浩平は深く頷いた。
「なるほどね。啓介を取り合う二人の男と女、か」
「そこ、変なこと言わない」
須藤さんが突っ込む。相手が有名人とはいえ、知らない人だ。突っ込むことが出来る須

藤さんが不思議だ。
「まあ、俺としちゃ不愉快極まりない話だ。理由も同じで先約があるというのに居座られるのはいけ好かない」
言いすぎだ、浩平。
「と言ってもだな、俺は別に毎日啓介と会いたいって訳じゃない。ホモでもゲイでもバイでもないからな」
その言葉でお嬢さん二人めっさ引いてますよ。
「っつー訳でだ。ここは大人しく和平交渉しようじゃないか」
「和平交渉？」
「そ。俺は啓介に二日か三日に一度会えるくらいでいい。残りの日にちはそっちで使えばいいと思うわけだ」
「え？　僕の意見は？」
思いっきり無視されてますよね？
「啓介はどうせ勉強しかしないんだろーが」
「そりゃそーだ」
って、須藤さんにまで言われた。
「というわけで、それでいい？」
「私は構わないけど、千陽は？」
「え、あ、私も大丈夫」
消え入るような声で直井さんが言う。相変わらずな人だ。
「んじゃ日取りを決めるか」
「はいはい」
浩平は胸ポケットから生徒手帳をとりだした。対しての須藤さんはぶ厚くなった自身の手帳を取り出す。どうしてあんなに厚くなるのかと疑問に思う。
二人は仲良く日取りを決めているので、僕と直井さんがすっかり取り残されてしまった。
「えっと、元気？」
「え、あ、うん」
終了。いや、これで会話が終了だなんて。一瞬悲しくも思うが、それも当然かと思い直す。正味、気まずい関係なのだ。
「なんでかなぁ」

小さく漏らして窓の外を見つめる。路地に面したこの店からは空を拝むことも出来ない。コンクリートの壁と、フェンス。それに散乱したいくつかのゴミが見えるだけ。気晴らしにもならない。

今のこの状況は僕自身が招いたものだ。それは重々承知している。だからこそ納得がいかないというか。どうしてここにいるのだろうか。その疑問だけが残る。どうして僕がいるというこの場に。悲しいような、辛いような。そんな顔を俯きで隠してまで。

僕らは順調といえば順調だ。そりゃ、彼氏彼女の関係としては生温い事この上ないだろうけど。それでも僕は、満足だ。

「今度の休みどうする？」

いつもの喫茶店。駅前通から一本路地を入ったところにある、僕達のいつもの店。無口なマスターに代わり、ドアベルと静かな空気が出迎えてくれる。僕の好きな店だ。

「うーん……」

彼女は困った顔をしながらアイスコーヒーと氷で満たされたグラスをストローでかき混ぜる。

「どうしよっか」

はにかみながら疑問で疑問に返される。

最近は二人の時間が増えた気がする。気がするだけで、実質増えたかと言われれば手を挙げざるを得ない。

じゃあ、どうしてそんな気がするのか。それは密度が増したからだと思う。最初の頃のようにどう接してよいのかと慌てふためくこともなくなり、お互いに自然体になれつつある。

「今年から受験だね」

今は春休み。呑気にここでお茶していても、僕達は四月からは立派に受験生。

「うん」

さっきまでの話題は何処へやら。ころころとそれが姿を変えるのは僕達の特徴だと思う。

「後藤君は成績いいよね」

「ま、まあある程度」

僕は成績を隠すようにしていたから、漠然とした情報しか渡していない。どうしてかといわれれば、他人から恨み妬みを買うのは御免だから。僕の詳しい成績は、浩平しか知ら

ないと思う。言いふらしてなければ。
「じゃあさ、勉強見てもらおうかな」
「僕でよければ」
「ありがとう」
浮かべる笑み。僕は段々と好きになっていた。彼女のことが。まだ自信を持って言えるほどじゃないけど。それでも、心の中に確かに出来上がっていた。

結局、勉強見てあげなかったな。そう思うと、残酷だ。この状況は。一体何の考えがあるのだろうか。
「直井さん」
「え？」
何でいるの、と口を開きかけた。けど、声が出ない。酷な言葉は、紡げない。僕にとって、彼女にとって。
「……何でもない」
それで精一杯だった。
「何が『何でもない』なんだか」
脇から声が出た。浩平だ。
「日取り決まったよ」
「……そう」
「で、問題の場所なんだけどな」
「……」
日取り。場所。僕は浩平に、別の日は前の二人に教えるわけか。
「啓介、聞いてるか？」
「ううん、聞いてない」
「ショック」
「……ああ、そうか」
「何が？」
「ああ、そうかそうか。全く、酷だなぁ。僕も」
いや、寧ろ保身か。不利な状況を打破したいと思っただけだ。
「お、おい、啓介？」

「ケースケ？」
「あ、ごめん。ちょっと考えてた」
「おいおい、こんな時に――」
「あのさ、勉強場所は――うん、学校でいいね」
「学校？　空いてるの？」
「受験生用に解放しているよ。流石に土日は空いてないけど」
「でも、うん、それが一番かな」
須藤さんが賛成する。
「でさ、みんな一緒で良いんじゃない？　場所が一緒なら」
「あ、そうか」
納得、というように浩平は頷く。
「私はいいけど……千陽は？」
「え、あ、うん。私も、大丈夫」
「それじゃ、それで決定。詳しいことは明日にでも決めようか」
「あ、ああ」
浩平は急に僕が仕切りだしたことで呆気に取られている。気の抜けた返事がその証拠だ。
「それじゃ、今日はこれで終了。帰ろうか」
僕が席を立つと、遅れてみんなも立ち上がる。カウンターに五百円玉を置き、ドアベルを高らかに鳴らせて外に出た。
自室に着くと、僕は思い切り息を吐き出した。それこそ、肺を空っぽにするかのように。それくらい、息が詰まっていた。途中から思考をほとんど閉鎖していたせいもあって、ベッドに転がった頃には様々な思いが交錯していた。
「……これで、良かったのか」
本当なら断っておくべきだった。けれど、断れなかった。ああ、もう、女々しい。
「一度終わった関係なのに」
そう、僕達の関係はすでに終わっている。僕と彼女の関係。友達以上、恋人未満。いや、それ以上だった。少なくとも、僕の気持ちは最初のときよりはずっと彼女に向いていた。それは隠しようもない。
「はぁ」
再び大きなため息。白い息が上がったのを見て、初めて暖房を点けていない事に気付い

た。亀のようにゆっくりとした動きでエアコンのリモコンを掴み、スイッチを入れる。鈍い駆動音を立てながらそれは動き出した。

「どうしようか」

どうしようもない。自問自答。全く意味がない。

「はぁ、酷だよ、全く」

何度目かしらないため息。酷過ぎる、全く。一度終わった関係が顔を突き合わせてお勉強か？　笑えない。

あれから一度も顔を合わせていないというのに、全く。酷なんだ。

三年になると、僕等はクラスが分かれてしまった。僕は国立理系、彼女は私立文系なのだから仕方ない。自然と顔を合わせないことが少しばかり怖かったが言えはしない。

受験学年になったからといって、僕らの関係は変わらない。変えないでいた、という方が正しい気持ちもある。なんと言うか、段々彼女に惹かれていく自分が嬉しくもあり恥ずかしくもある。

夏休み前の休日。いつものように僕等はいつもの喫茶店でいつものメニューを楽しんでいた。

「そろそろ夏休みかぁ」

「そうだね」

ふと呟いた言葉に相槌が返ってくる。

「でも今年は受験があるし、遊びには行けそうもないね」

「うーん、そうだね」

彼女は少しだけ残念そうな表情を浮かべた。僅かだけの動きだったので、彼女は覚悟していたのだろう。

「まぁ、いつも通りか」

僕等は学校で殆ど二人きりにならない。最初の約束の通りに。だから、こうして二人になるのは得てして休日だけだった。

「あはは、そうだね」

小さく笑いを浮かべる。その笑顔を見るだけで、どこか幸せな気分になった。僕は引く事の出来ないところまで歩み入ってしまった様だ。

「……」

不意に、よぎる。
僕は確かに惹かれている。好きか嫌いかだったら、間違いなく前者。それは自信を持って言える。けれど、彼女のように、はっきりと言えるだろうか。
――分からない。
だから結局、僕は彼女に「好き」とは言えなかった。自信がないのだ。好きになっている自信が。好きだという自信が。
「どうしたの？」
「ん、なんでもない」
少し怖くなった。今のまま関係を続けていていいのだろうか、と。こんなに不甲斐ない自分と覚悟を持った彼女が、このまま続けてゴールはあるのだろうか。
「そろそろ帰ろうか」
「うん」
その日から、僕は彼女に会うことを止めた。

あれから約半年。正確には五ヶ月とちょっとくらい。文字通り、僕は彼女と一度も会うことはなった。元から週末の予定は僕から話していたし、夏休みも挟んだおかげで本当に会わなかった。受験でお互いに忙しくなっていたし、会えないのはほぼ当然のことだった。
メールがたまに来るけど、忙しいと返していたら次第に来なくなった。
だから、自然消滅。
これで良いのだ自分に言い聞かせたのは何ヶ月前だろうか。まさかこんなことになるとは思いもしなかった。
「本当に、何なんだ」
愚痴を零すが、何も返ってこない。エアコンが唸る無機質な音だけが耳に響いていた。

終業式は滞りなく終わった。ＨＲで成績表が配られたが、たいして興味はない。
この紙切れのために勉強しているわけじゃないのだから。
「啓介―」
ＨＲが終了した途端、浩平が教室に入ってきた。
「どうしたの？」
「どうしたもこうしたも、今後のこと決めないと」

「あ、そうか」
昨日自分で言い出したことだ。すっかり忘れていた。というか、忘れようとしていた。
「須藤さんって、クラスどこか分かる？」
「国文だから――」
「ケースケー」
言い終わる前に須藤さんも教室に入ってきた。
「どうしたの？」
「どうしたの？　って、今後のことだよ」
さも当然のように答えられた。それもそうか。好きで僕に話しかけてくる人間は浩平くらいなものだし。
「あれ、千陽は？」
「私文はまだＨＲしてたけど」
浩平が答える。考えたら浩平は私立理系で私立文系の隣のクラスだ。知っていてもおかしくはない。
「というか、何で僕の教室に来るわけ？」
「「近いから」」
二人の声が見事に重なった。そういうことか。
「まあ、詳しいのは昼食の後にしたいんだけど」
僕が提案すると二人は頷いた。
「啓介、今日の昼はどうするんだ？」
「パン――は売ってないんだよね。ちょっと外に出て買ってくるよ」
最低限の貴重品を持って立ち上がる。すると須藤さんもカバンから財布を取り出した。
「あ、私もー」
「そっか。それじゃ俺はここで待ってるから」
「うん、わかった」
僕達は浩平に留守番を任せると学校の外へと繰り出した。
校外には徒歩十分しないところにちょっとした大型食料品店がある。校外で調達するなら大抵はそこだ。
「ね、ケースケ」
道中、横に並んだ須藤さんから話しかけられた。

「何？」
「千陽に会ったの、久しぶりでしょ」
「……うん」
やっぱり、彼女は殆どを知っているようだ。
「どう？」
「どうって、何が？」
「久しぶりに会った感想」
「それを聞いて、どうするの？」
「どうもしないよ」
「……なんで、僕等を会わせたの？」
「それはまだ言わないよ」
「酷だよ、全く」
「千陽にとって？」
「……お互いだよ」
「ふーん」
それきり、須藤さんは口を閉ざしてしまった。僕もさして話すこともないので、気にせずに店へと足を進めた。
店内には僕達と同じ制服がちらほらと見受けられるが、大多数は近所の主婦であった。昼時ということもあり、混雑した店内を須藤さんと巡る。
「ま、結局パンになるわけか」
「学校で料理できるわけじゃないからね」
「家庭科室があるんですけどー」
「さて、どれにしようかな」
須藤さんの言葉を軽くスルーしつつ惣菜パンを物色する。焼きそばパン、コロッケパン等のメジャー品は早くも量が少なく、売り切れの品もあった。僕はむしろ、売れ残りするような種類が好きだから関係ないといえば関係ない。パンのチャレンジャー、浩平にそう呼ばれた事もあるくらいだ。
須藤さんは女の子らしく菓子パン系を数点見繕い、飲み物を見に行った。僕も面白そうなパンを見つけ、その後を追った。
僕はパンを二つ、須藤さんは三つ買い店を出た。

「ケースケはどんなの買ったの？」
「ん？　これ」
ビニール袋から買ったばかりのそれらを取り出して見せた。
「えっと、じゃがバタパン？」
「中にじゃがバターが入ってるんだって」
「へ、へぇ」
それっきりパンについては一切言及してこなかった。
世間話をしながら教室に帰ると、浩平が僕の机でマンガを読んでいた。一体何処から取り出したのだろうか。
「お帰り」
「ただいま」
軽く返事をしつつも、僕は容赦なく浩平を椅子から押しのけた。
「なんだよー、椅子くらい、別に良いじゃん」
「そういうなら他にも椅子は余ってよ」
須藤さんが僕の代わりに切り返す。
「うう、お前ら仲良くない？」
「そりゃ、伊達に二年半同じ部活やってないから」
「あーあー、そういうことかい。俺は仲間はずれって訳だな」
浩平はいじけたように小さくなってしまった。口調は明るいものなので、わざとやっているのだ。
「はいはい、拗ねない拗ねない」
須藤さんも分かっているようで、小さな子供をあやすように浩平の頭を撫でていた。
「ちょ、子供扱いかよ」
「まるっきり子供じゃない」
僕はその様子を見ていた。
「二人とも、仲良いね」
「まさか」
二人は声をそろえて言った。なんだ、仲が良いじゃないか。そう思ったが口には出さない。二人から突っ込まれたら僕はうろたえるしか出来なさそうだし。
「ところでさー、千陽は？」

「さぁ、俺はここでマンガ読んでたし」
「見に行きなさい」
「はいはい」
須藤さんに強く言われた浩平は渋々、といった表情をして立ち上がった。
「啓介、行こうぜ」
「え、僕も？」
「なんとなくな」
「ま、いいけど」
何のつもりか知らないけど、僕に伸ばされた手を取って立ち上がった。
「んじいってくらー」
「はいはい」
須藤さんはしっしと手を振って浩平を追い出していた。ここは僕の教室なのに。僕は聞こえないように呟いた。
私文のクラスはすでにＨＲが終わっていた。浩平が知り合いに声を掛けて直井さんを呼び出してもらう。
「あれー、直井はもういないみたい。鞄もないし帰ったんじゃね？」
「そっか、ごめんな」
人の良さそうな笑みを浮かべて謝る浩平。いや、実際良い奴なんだ。きっと。
「何処行ったんだ、直井の奴」
「僕に聞かれても」
知らないものは知らない。
「心当たりとかないのか？　元彼氏」
「違うって」
僕は彼氏ではない。直井さんは彼女じゃない。ただ、その少しばかり手前の関係だっただけだ。
「ん、まあ、いなかったっつーことで戻るか」
「うん」
浩平の提案を否定する理由もないので踵をを返して歩き出す。
「あ、ちょっとトイレ」
「はいはい」

小走りでトイレに向かった浩平を呆れた息で送ってやる。一人で戻るのもどうかと思ったので、トイレ近くの壁に寄りかかって浩平を待つ。

だけど、あることに思い至った僕は直ぐに背中を離し歩き出した。もしかしたら、というよりは半ば確信的。迷うことなく僕はある場所を目指した。

階段を登る。何度登ったか分からない階段。昔は一人で、少し前は二人で、でもまた最近は独りになった。その場所。

「やっぱり、いた」

お気に入りの場所。昔と同じ位置に直井さんは座っていた。

「後藤君」

「……みんな僕の教室で待ってるよ」

僕は直井さんの顔を見れず、窓の外に向かって言った。

「うん……」

ゆったりとした動作で立ち上がり、少しだけ悲しそうに僕を見てから階段を降りていった。その直ぐ後を追うことも出来ず、しばらく外を見てから教室に戻った。

「あ、啓介。何処行ってたんだ？　直井来てるぞ」

「ん、ちょっとね」

クラスの奴は殆ど出払っているようだ。僕達と、もう一つのグループがいるくらい。そのグループもにぎやかに話してるので僕達が騒いだところで別に迷惑じゃないだろう。

「それじゃ、作戦会議。議長、後藤ケースケ」

「はいはい。書記、須藤理」

「はい」

僕の机の四辺に各一人ずつ座る。

「それじゃ議題を……横井浩平」

「はい。今回提案する議題は『ザ・ウィンターバケーション　受験生達の冬休み勉強編』です」

「タイトルはともかく、この議題で宜しい方は挙手をお願いします」

全員が手を挙げた。

「それでは今日は冬休み勉強会について話し合います」

鞄からルーズリーフを一枚取り出す。

「それでは、まず勉強会の日程を決めたいと思います。異議のある人？」

誰も手を挙げない……と思ったら浩平が手を挙げた。
「横井君」
「はい。私の提案した『ザ・ウィンターバケーション　受験生達の冬休み勉強編』という議題が使われていないのですが」
「……ああ、もう、ここでボケるなよ、浩平」
「そうだぞー」
僕と須藤さんからブーイング。
「な、なんで？」
「真面目に会議してたというのに、浩平は」
「そうだぞー」
「く、くそ。俺はこういう空気に絶えられないんだよぅ」
「はぁ。ま、気持ちは分かるけどね」
「ケースケ、もういいんじゃない？　普通にやろうよ」
「そうだね」
それじゃ、とルーズリーフに簡単なカレンダーを書いた。冬休みだけのカレンダー。日付の欄には大きめの空白を残しておく。
「それじゃ、冬休み中で予定の空いている――というか、勉強できる時間を各々書いて」
「はいはい」
真っ先に浩平が書き始めた。冬休み初めの日から終わりの日まで矢印で繋ぎ、いつでも、と書き加えた。
「ヒマ人なのか、勉強家なのか分からない予定だこと」
いいながら須藤さんがちょこちょこと書き加えていく。
ちなみに僕はいつでもいいので、そこは浩平と同じだ。その旨を伝えて直井さんに紙が回る。そして最後に僕が浩平のところに自分の名前を書き足して作業は終了した。
「……あのさ」
机に広げた紙を見て言う。
「結局、ほぼ毎日僕と浩平がいるんだから、いつ来てもいいってことだよね」
沈黙。いや、寧ろ時が止まった。賑やかだった他のグループも話題が尽きたか、僕が言った瞬間に無音になった。
「……取り越し苦労？」

「結果的にそうなっただけ、と言いたいところだな」
須藤さんの漏らした言葉に浩平が返す。何だかんだ言ったところで、やはり二人の仲はいいと思う。相性だろうか。
「あー、じゃ、明日からだな。俺と啓介は基本的に――ここの教室でいいか。ここにいるはずだから。居なかったらメールか何かで啓介に聞きなさい」
何で僕が、と思ったが、僕が唯一全員のアドレスを知っていることに気付く。上手いこと連絡係にも納まったというわけだ。
「つーわけで、解散」
浩平の言葉で今日の会議は終わった。
その後帰り際に喫茶店寄って、マスターと少しばかり話をした。勉強すると言ったら、年末年始は特別に店舗を貸してくれる約束をしてもらった。ただ、掃除は自分達でやる事、大晦日、元旦は開けないと条件を付け加えられたが、借りる身としてはそれくらいはして当然なので快諾した。
勉強会一日目。
学校は午前九時から午後五時までの八時間だけ開く事になっている。その時間を逃さないように、と思ってはいたが、僕はいつもの電車に乗っていた。時刻はまだ八時にもなっていない。こんな朝早くからは喫茶店も開いていないのでどうしようか、と悩んでいるうちに見慣れたホームが窓から見えた。
駅のコンビニで立ち読みして多少時間は潰れたものの、それでもまだ時間が有り余っている。簡単な朝食を買って、なるべくゆっくり歩いて向かうことにした。通学用のバスに乗ろうかと思ったが、時間が有り余っているため歩いて向かうことに。それほど遠いと言うわけでもないのだ。
そうして歩く事数十分。僕は校門の前に立っていた。
「閉まってる？」
時間はもう九時だ。閉まっているはずがない。というのに、この有様。試しに門戸を押してはみたが動きはしなかった。良く見ると、南京錠で施錠されていた。
仕方なく、校門前に座りこみ、買ってきた食事を摂る事に。それほどお腹が減っていると言うわけじゃないが、それでも何か胃に入れておきたい。
そうして、僕がサンドイッチの三つ目に取りかかった時に、直井さんと会った。
「お、おはよう」

「……おはよう」
小さな声で挨拶された。つられて僕も挨拶。そして訪れる沈黙。相変わらず僕はもそもそとサンドイッチをエネルギーに変換し続けているし、彼女は彼女で、僕から少し離れたところで校門により掛かっていた。
「今日、早いね」
サンドイッチが食べ終わるちょっと前くらいに彼女が口を開いた。
「ん、ちょっと待って」
最後の一欠を口に放り込み、目の前にある自販機に向かう。小銭を出してミルクティーを二つ、購入した。
「はい」
相変わらず立ち続ける直井さんに片方渡し、僕は再び座りこんだ。
「今日は、間違えていつもの時間出来ちゃったから」
「そ、そうなんだ」
「直井さんは？　随分早いと思うんだけど」
「私、も、そんなところ、かな」
プシュ、カキ。プルタブを起こして暖かいミルクティーを含む。必要以上に甘ったるいが、これはこれでいいと思う。
「そうなんだ……」
そこで会話が途切れる。気まずい空気。逃げ出したい衝動に駆られるが、腰は一向に浮く気配はなかった。
自然消滅で関係抹消された恋人未満の僕達。やっぱり、顔は合わせにくい。どちらかが相手を嫌いになった、と言うのであればまだ気持ちに踏ん切りはついていたのだろうに、そうではないから厄介なのだ。
「……後藤君」
「なに？」
「……私がダメだったのかな……」
「……そんなわけ、ないよ」
それで終わりにしてしまった。考えれば、それは彼女が精一杯の勇気を振り絞った一言なのだと気付くのには遅すぎた。だから、僕達はすれ違ったままなんだと思う。
それから会話をするでもなく、ふたりボーっとしていたら鍵が開いた。どうやら、担当

の先生が寝坊したらしい。その事に若干肩を落とし、校舎に僕達は消えた。直井さんはいつまでも僕の二歩後ろにいた。

勉強会二日目。

この日は二人の女子が来ない日なので、僕と浩平はお気に入りの場所で勉強していた。何だかんだで日辺りが良いから暖かく、そして何よりも静かな場所だからだ。

「……なぁ、浩平」

浩平はペンを止めてこちらを見た。けれど、僕はその視線を無視し、問題を解き続けた。

「何？」

「お前と、直井のことだけど」

「うん」

「ちゃんと、話し合ったか？」

「……それが出来たらこうならなかったんだよ」

「……そうか、ごめん」

「いいよ」

僕達は誤解の積み重ねの上で今生きている。それでも、その積み重なったものを今更崩すのは怖くて、僕には出来なかった。

僕達が、いや、僕がちゃんと話していれば。そう思ったことは何度もある。けれど、出来なかった。だから、今の状態は自分が招いた。それだけで酷な話だった。

自分の罪悪が目の前で晒されている状態は、覆いたくても覆えないほどのものだった。

勉強会は三日、四日と過ぎてゆく。二日に一日程度で僕と浩平の二人きりだったのが救いと言えば救いだった。

そして年末に入り、いよいよ学校も閉鎖されて追い出された僕達は約束どおり、あの喫茶店で勉強していた。

「いいのかな、こんなにお世話してもらっちゃって」

ふと須藤さんが漏らした事があった。厚意、と言うには大きすぎる。その証が僕の右手に握られている。

「鍵まで預けちゃって……」

そう言うことだ。

「それに見合うことをしなくちゃな。プレッシャーのかけ方としては上々だろ」

冷静に浩介が言う。まあ、そう言うこと。これはマスターなりのプレッシャーを掛けて

いる事になる。
「ま、僕達に出来る事は勉強だけなんだから。やろう」
「そうだな」
「うん」
そうして日々は過ぎてゆく。大晦日を越え、正月を過ごし、一月二日。少し早めの電車に乗っていたら、携帯が震えた。
浩平からのメールだった。今日来られない、とそれだけだった。切羽詰っているのだろう、僕もわかった、と四文字だけのメールを送った。
喫茶店の調理場を使うことは流石に出来ないので、駅を降りると、コンビニで食料を調達し、歩き出した。
僕が責任を持って鍵を預かっているので、僕が一番早くに到着しなければならない。それは自明だ。ということで、早めに着ているのだけれど。
「あ、お、おはよう」
先客がいた。直井さん。僕の元彼女らしき人。今は、二人っきりで会いたくない人。
「うん、おは、よう」
途切れつつも挨拶をしつつ、鍵を開けて店内に入った。誰もいない空間にドアベルが悲しいくらい響いた。
僕が入ると直井さんも後に続いて入る。それを気配と音だけで探りつつ、暖房のスイッチを入れた。暖房はマスターの了承済み。まったく、いい人過ぎる。
「あの、ね」
いつもの席に座った直井さんは声をだした。僕しか聞く人がいないから、僕に向けてだろう。
「なに？」
「今日、理ちゃん来れないって」
「そっか。わかった」
短く返事をして僕もいつもの席に着く。直井さんの斜め前。窓際の端っこ。ここが定位置なっていた。
今日は、二人。長い時間を二人で過ごすのは怖い。どうしようもないくらいに、怖い。だから勉強に没頭しよう。そう思うことにした。
無言で参考書とノートを取り出して問題を解きだす。僕を見てか、直井さんも同じよう

に勉強に取りかかった。
と、思ったところで、直井さんのペンは進まない。僕は自分のノートと参考書しか見ていないが、音で分かる。盗み見ると、ペンは何かを書き出そうとノートの上にあるが、手が一向に動かない。
何か悩んでいるのだろうか。そう思ったが、分からなければ聞いてくるはず。しばらく様子を見る事にして僕は再び自身の勉強に取りかかった。
一問、二問、三問．比較的時間が掛かる物理の問題を解き続けていたが、それでも響くのは暖房の音、それに僕の走らせるペンの音だけだった。
「……どうしたの」
心配になって、つい、話しかける。つい、というのは本当にそう。本当は彼女と話することが怖いくらいなのに。
「……うん、ちょっと」
「どこか分からないところでも？」
「……うん、ちょっと」
上の空の答え。表情は変わらずに、窓の外にある虚空だけを見つめているようだ。
「……」
それ以上、何も言えなかった。勉強しようにも、心配で手につかない。どうしようもない。
仕方なく、気分を入れ替えるためにコンビニの袋を漁った。朝食用に買った、パンと飲み物を取り出して、もそもそと食べだす。
「ねえ」
サンドイッチの二つ目を手に取ったところで声があった。
「うん？」
「もう、今更だけど、ごめんね」
「……何が？」
「やっぱり、私は重荷だったのかな、って」
「え？」
「ごめん、私帰るね。勉強、できそうもないや」
悲しそうに笑って、彼女はそそくさと出て行ってしまった。余りに唐突で気を取られていた僕は、喫茶店に一人取り残されてしまった。

「……は、はは」
自然と笑いが込みあげてくる。悲しくて、悲しくて。どうしようもないくらい情けない自分が悲しくて。そして、彼女が悲しくて。
「はは、当たってる、じゃないか。まったく」
まったく。僕は自分に怒りを覚えることも出来ず、ただ肩を震わせていた。
似ている？　まったく、そっくりじゃないか。
どうしようもない自己嫌悪で心を染め、僕も喫茶店を後にした。勉強する気には、どうしてもなれなかった。
それからは、僕は直井さんに話しかける事はなくなった。直井さんも僕に話しかける事はなかった。ただ、勉強に没頭して話す暇もなかった、といえばいい訳がましいだろうか。
そうして時は過ぎてゆく。気がつけば冬休みは終わっていた。
「そろそろセンターだな」
「そうだね」
放課後。いつものように僕と浩平はあの喫茶店にいた。そろそろセンター試験まであと二週というところ。自主学習場所として教室が夜まで開放されているものの、僕達は居心地がよいここを勉強場所として選んでいた。
店内はいつものように閑散としていて、客は僕達を除けば片手で足りる程度。店の経営状態が心配になったが、どうやら日中に稼いでいるらしい。これはマスターから聞いた話だ。
「啓介はどこ受けるんだ？」
「うーん、センター次第かなぁ」
「第一志望は？」
「それはね……」
僕が二の句を接ごうとした時、新たな来客を知らせるドアベルが鳴り響いた。
「やっぱりここにいた」
そんな声とともに。
「あれ、須藤？」
「よ、不良」
相変わらず須藤さんは浩平を不良と呼んでいた。須藤さんは人を見る目はある方だと思うから……親しみを込めた渾名として彼女の中で定着しているのだろう。

浩平も気を悪くするような事もなく、須藤さんと接しているし。まあ、浩平は普段から不良呼ばわりされているから、気にしないだけかもしれないけど。

「ケースケも一緒だね。よかった」

何がよかったのだろうか。

「あのさ、勉強見てくれない？」

「見るって、僕が？」

「うん、そう。他に頼る人いなくてさ」

「おいおい、俺は無視か？」

「そう言うわけなんだけど、大丈夫？」

須藤さんは徹底的に浩平を無視している。いつもの事だけど、なんだか浩平が可愛そうだ。

「僕は大丈夫だけど」

「俺も邪魔さえしなければ」

「ありがとー。あ、マスター、アメリカン一つ」

注文しつつ僕の横に座る。いつもの四人席のいつもの配置そのままだ。

いつもの、そう、いつもの。冬休みで培った僕達のいつものだ。いつも浩平と僕が先に来ていて、対面で座る。そして須藤さんと、直井さんがきて、それぞれ僕と浩平の横に座る。それがいつもの配置。

「……」

須藤さんが勉強道具を出していると、マスターが無言で注文の品を伝票とともに置きに来る。

「ありがと、マスター」

マスターは軽く会釈して再びカウンターの奥へと引っ込んで行った。

「いや、最初ね。ケースケの教室行ったらいなくてさ。友達に聞いたら不良と帰ったって聞いてね。もしかしたらここじゃないかな、って来たらドンピシャ」

「マシンガントークだな、おい」

「うるさいわね」

「うるさいのはお前だ、須藤」

浩平は見せ付けるように店内をぐるりと見渡す。須藤さんはそれを見て、初めて自分が大きな声でしゃべり過ぎていた事に気付いた。

「あ、ごめん」
「ちゃんとＴＰＯを弁えろよな」
「アンタが言える台詞じゃないでしょ」
「なんだと」
「二人とも、声、大きい」
参考書から目を離さずに注意を促す。それで二人とも静かになって、勉強をはじめた。
と思ったら、須藤さんは直ぐに口を開く。それでも声量は抑えていた。
「ね、千陽来なかった？」
「直井？　見てないけど……啓介は？」
「僕も見てないよ」
「そっか」
会話はそれきりで、再び僕達は勉強をはじめた。私語も少なく、出てくる言葉は勉強のやり取りのそれくらいなものだった。
一時間、二時間と時間は過ぎて、夜の八時を回った頃、マスターから閉店を告げられ、僕達は外に出た。
「あー、疲れた」
「まだ数時間しか勉強してないだろうが」
「いいのよ、私はそれでも」
「あー、そうかい」
二人の軽口を右から左に流しながら駅へと向かう。
「えっと、時間はっと……うわ、俺先に帰るわ。じゃーなー」
言うが先か、浩平は走って行ってしまった。電車の時刻が迫っていたようだ。
「うーん、二人になっちゃったね」
「そうだね」
僕達の乗る電車はまだまだ時間がたっぷりあった。だから取り立てて急ぐわけも鳴く、ゆったりと歩いていた。
「ね、ケースケ」
「何？」
「どうして千陽と別れたの？」
「……さあ」

直井さんと別れた理由、か。別れたわけではないのだから上手く言えない。
「さあ、って、何か理由でもないと」
まして、須藤さんはあっち側の人だ。おいそれと言うわけにもいかないだろうな。
「うーん、そもそも付き合っていたわけじゃないと思うんだけど」
「いやいや、話聞く限りじゃ、付き合っているとしか理解できなかったけど？」
「そもそもさ、付き合うってどういうこと？」
「そりゃ、好き者同士が――」
「そういうこと」
「……簡単に言うね」
「そうとしか、言えないからね」
「なんかムカツクなぁ」
「うん、そうだろうね」
「……否定も自己弁護もないの？」
「言った所でいい訳にしかならないと思わない？」
「聞いてみなくちゃ分からない。これは私の持論」
「そう」
それっきり僕は黙った。言う気はない。その事を態度で伝えるためだ。それでも須藤さんはしつこく聞いてきた。
「嫌いになったの？」
「嫌いになったわけじゃない。というか、最初の方の話聞いたでしょ？」
「好きでも嫌いでもないけど、これから好きになるかもしれない、ってやつ？」
自分で言っておいてなんだけど、凄い恥ずかしい台詞をよくもまあ吐いたものだ。自分の顔が紅潮して行くのが分かった。
「そういうこと」
「……好きになれなかった、というわけ？」
「……」
それ以上は言わない。僕の気持ちを知っているのは僕。そして浩平だけだ。
「だんまりしてるのは、否定？　肯定？」
「さあ」
「はぐらかせないでよ」

「正直言えば、言いたくないんだけど」
「どうして？」
どうして。僕が聞きたいくらいだ。どうしてそんなにも僕に語らせたいのか。
「はあ、千陽も難儀だったんだね。こんなのが好きだなんて」
「そう」
「……ね、反応ないの？」
「何が？」
「気付いていないならいいよ。あ、私コンビニ寄ってくね。先、駅行ってて」
「うん」
駅前で一旦須藤さんと別れた。どうせホームで会って、また根掘り葉掘り聞かれると思うと、少しだけ辟易してしまう。
改札を抜け、いつものホームのいつもの場所。電車が来るまで、まだ十分ちょっとあり、人影もまばらだった。
ベンチに座って荷物を降ろすと、ため息が自然と漏れた。いきなりあんな事を聞かれるとは思いも寄らなかったからだ。自分の弱さが、時を刻む毎に身体を締め上げる。苦痛がため息として出たというところだ。
「なんでかね」
ぽつりと呟く。幸い、回りを見ても誰もいなかったので聞かれていないだろう。それなら、いい。
何も考えないように。瞼を閉じて見たが、それが過去を思い返すものばかりがフラッシュバックしてしまう。
始めに会った頃。話をするようになった頃。急に告白された日の事。不器用なデートを重ねていた頃。お互いの距離が分からずにどぎまぎしていた頃。そして、次第に離れていった頃。
全てが懐かしく、全てが苦しい。今の僕には、苦しい。
「お待たせ」
僕が苦痛で耐え切れなくなりそうになったとき、タイミングが良いのか悪いのか、須藤さんが合流した。
「ん」
僕は目もくれず、ただ短く返しただけだった。

「機嫌、悪い？」
「そりゃ、な」
「そっか」
彼女も彼女で、言葉短く会話をした。顔は見てないが、声のトーンが多少落ちていることもあるし、複雑な顔をしていることだろう。
「……ケースケ」
しばらくしてから、再び須藤さんは口を開いた。
「聞いてる？」
聞いてるが、返事をする気分ではない。
「ん、目が開いているなら大丈夫かな」
勝手に話し始めた。
「やっぱり、聞いておきたいよ。どうしてこうなったのか。もちろん、私は千陽から聞いているけど、でもそれはやっぱり一面的でしょ？　ケースケの面も聞いておきたいの」
「……話せないよ。今は何も。そして、多分、これからも」
いい終わらないうちに電車がホームに滑り込む。荷物をもって立ち上がり、ドアが開放されるのを待って、車内に乗り込んだ。
「ねえ」
隣に座った須藤さんは更に口撃を繰り出すが、僕はひたすら目を瞑って耐え続けた。須藤さんとはあと五分も一緒に居ない。無視し続ける事にした。
「……じゃあね」
悲しそうな声色。扉が開くと同時に隣の友人は去っていった。
「……く」
小さくうめき声を漏らして、僕は早く電車が目的の駅に着かないかと祈っていた。

「ねぇ、後藤君」
二学期の中間テストが近くに迫っていたある日、僕は呼びとめられた。確かに呼び止められたのだけれども、それが自分だと気付くのに時間が掛かった。
僕は良く浩平と一緒に居たので、声を掛けられること自体が少なかったのもある。実際、僕と会話するくらいの人物は片手で足りるか、といった具合だったのだ。
「僕？」

「え、と、うん。このクラスに後藤っていう苗字は後藤君だけだと思ってたけど」
「あ、ああ、そうだっけ」
そんなこんなだから、僕はクラスメイトの顔と名前が一致しないくらい、そこから浮いていた。
「何？」
平静を保つが、内心、顔が引きつっていないかと心配だった。
「その、テスト範囲教えて欲しい、けど」
「あ、ああ。それくらいなら」
それが彼女と交わした、最初の会話だった。他の人に聞けばいいものを、と思ったりもしたが、単なる気まぐれということで済ました。
それから、僕は度々彼女と会話するようになった。

どうして思い出すのだろう。
明かりを消した部屋の中。布団の中で懐かしい光景を思い出して気持ち悪さが蜘蛛の様に這い上がってくる。自己嫌悪でどうしようもなくなって、いっそその足で八つに切り裂いて欲しいと思うくらいだ。
起き上がるのも億劫で、掛け布団を頭まで被り、何も思い出さないように、夢を見ないようにと祈りつつ僕は眠った。
結果、夢を見なかったが、熟睡し過ぎて遅刻ギリギリになってしまった。
放課後、いつものように浩平と喫茶店へ行こうとしたら須藤さんに呼び止められた。昨日で味をしめたのか知らないけど、僕は顔を合わせたくはなかった。須藤さんはそんな僕の様子に構いもせず、直井さんを弾き連れ、四人でいつもの店に向かった。
「いらっしゃい」
マスターのローテンションな声を聞きつつ店内のいつもの場所へ。すると、テーブルに予約席の札が置いてあった。
「予約されてる？」
ポツリと漏らすと、マスターが音もなくその札を持って行った。一言、「キミたちのために」とだけ残して。
ありがとう、と心の中でお礼を言って、僕達はいつもの席へと収まった。
センターまで残り二週間。誰かが言い出したわけではないけれども、皆私語はなく黙々

と己の勉強に勤しんでいた。その事に、少しだけほっとして、心がチクリと痛んだ。
「何も聞かないんだね」
浩平と直井さんは同じ電車で乗って行ってしまい、ホームには僕と須藤さんが取り残されていた。
僕は再び須藤さんからの詰問があるかと覚悟していたが、須藤さんは一言も声を発さなかった。
「センター近いし、ケースケには重荷になりそうだからね」
「そっか」
たったそれだけの会話。それきり、電車が来ても、須藤さんが降りる駅に着いても、一言も声を交わすことはなかった。
それから、ほぼ毎日僕達は集まって勉強をするけど、それ以上のことは何もなかった。時期が時期だけに、遊びに行こうとも言える訳がないし、僕と直井さんが気まずい関係だと浩平も須藤さんも分かっていたからだと思う。
そして、センター試験が終わった。
今度は私立大学の受験が始まる。と言っても、僕には殆ど関係ない。
世の中は楽に出来ているようで、センター利用受験というものがある。センター試験の結果だけで合否を問うというもので、予想以上の点数の取れた僕はそのセンター利用受験しか受けていないからだ。
おかげで気が楽と言うか、一ヶ月近い時間を国公立受験にのみ使えるのだ。
「本当、羨ましいな」
浩平がそう漏らした。
「俺はセンター利用も一般受験もダブルで受けるっていうのにな」
「ご苦労様です」
僕が頭を恭しく下げると、浩平は苦笑していた。
「まあ、これからも勉強見てくれよ」
「うん、そのつもりだし」
「ありがてぇな、まったく」
ぶっきらぼうに答えるが、それは照れ隠しだと僕は知っていた。だから何も言わず、ただ微笑んだだけだった。
私立の受験が近くなったこともあり、学校は自由登校になっていた。そういうことで、

再び僕と浩平はあの喫茶店に通い詰めていた。朝から席を占領するわりに、この店で席が足りないという状況を未だ見ていない。不思議だ。
だが、忍びない事には変わりない。それに、あの人たちにも場所が丸分かりだ。僕はそろそろ、他の場所に移りたいと思っていた。そんな矢先だ。
「おはよー、マスター」
軽快な声が店内を駆け巡る。そして僕と浩平はほぼ同時に頭を抑えた。
「おはよ、二人とも。今日も元気に勉強しよっか」
「元気なのはお前だけだ、須藤」
「なんでよー。ケースケは同意してくれるよね？」
「……僕は、静かに勉強したい」
最近毎日のように須藤さんが来る。それもハイテンションでだ。
「えー。そんなぁ、連れないなぁ」
「連れなくて結構だから」
「コーヘイはどうなのさ？」
「俺も、お前に構っている余裕はない」
「えー」
「というか、須藤さん。静かにして」
「む、ケースケが言うなら仕方ないか」
「俺の言うことは聞けないと言う裏返しだな」
「そうだよ」
しゅんとなったと思ったら、すぐに切り返す。毎日の日課になりかけている騒々しさ。
それが、少しだけ窮屈だった。
一番の理由は、そう。
「というか、須藤。お前推薦で決まってるだろ？」
「……バレてた？」
驚いたような顔で僕を見る。
「……うん」
そう、須藤さんは推薦で進学先が決まっている。つまり、これ以上勉強する理由がないのだ。それなのに、ここに来て騒いだり勉強したりする。一体何の得が有るのか。
「ま、いいじゃん。私は私のやりたい事をやっているわけだし」

「それが迷惑とか考えないのか？」
「そう思ってるの？」
「ああ」
浩平は即答した。そろそろ本番という時期で、すでに進学が決定している人が目の前にいるのは迷惑以外何者でもない。ハッキリ言って、邪魔物なのだ。
「ケースケも？」
「言わずもがな」
僕は余裕で合格するラインの大学しか受けないから、僕だけなら大丈夫。だけど、浩平はギリギリの本命が残っているのだ。浩平のためにも、ここは首を振るしかなかった。
「はぁ、そうですか。みんな冷たいね」
「受験だからな」
もはや、浩平はテキストから顔を上げることなく言い放つ。
「じゃ、受験間近な人ならいいってわけだよね」
「お前以外なら誰でもいい」
またもや浩平は冷たくあしらう。が、それを聞いて須藤さんは唇を怪しく歪めた。
「そっか、うんうん。面白くなってきた」
一人で納得したと思い気や、携帯を引っつかんで外に飛び出して行った。
「……なんなんだ、あいつ」
「さあ。それよりも勉強しようか」
「そうだな」
再び自分の勉強に取りかかる。
さっきは、分からないような振りをしていたけど、内心分かってる。須藤さんが何をしようとしているのか。だから僕は、落ち着かなさを誤魔化しながらノートに数式を書き付けていた。
それから何分経った事だろうか。十分か、一時間か、それとも数分か。とりあえず、しばらくしてから、再び彼女は現れたのだ。
そして、予想通り。彼女は直井さんを連れてきた。
「これなら文句ないでしょ？」
「まあ、勉強するなら断る理由はないが、啓介は？」
「僕も……同じだよ」

「りょーかいっ」
須藤さんは軽快に返事をして、いつもの場所に収まった。直井さんもそれに習っていつもの場所へ。
「って、なんで須藤が座るんだ？」
「いいじゃん、邪魔しないし」
「いるだけで邪魔なんだよ」
「あらそう」
「あらそう、ってそれだけなのか？」
「だって、アンタからして邪魔なだけで、私は他二人から邪険にされてないわけで」
「……二人とも、うるさい」
僕が言うと、二人とも肩を竦めるように大人しくなった。
「須藤さんも、いてもいいけど邪魔しないこと。浩平もあまり突っかからないこと。いい？」
「ああ」
「うん」
二人が頷くのを見て、僕は再び勉強に没頭した。斜め向かいの直井さんが気になる事は気になるが、それを忘れるように、ひたすら問題を解き漁った。
須藤さんの言いたい事は分かる。やりたい事も。だけど、まだまだそれに対峙するには時期が悪い。そう思うことにした。
つまりは、この気まずい空間を作り出したのは僕自身に他ならない。簡単な事を言えば、僕に恋愛経験と自分に対する自信がなかったのが原因だろう。つまりは、そう言うことだ。

夏の終わり頃に浩平に相談した事が思い浮かぶ。
「はあ、つまり自分の気持ちが全然分かっていない、と言うことだろ？」
僕の疑問をぶつけた浩平は、そうやって一つの答えをくれた。
「……そう言うこと、なのかな」
「そう言うこった。というか、お前の初恋の時期は今なのか？」
「だから、それが分からないわけで」
「……はーはー、よーく分かりました。啓介が人並みに育っていないということだな」
「そんな言い方はないと思うけど、まあ、そうかなぁ」
「……人間ってのはな、難儀な生き物だ。考えて、それを表すことが出来る。理性と本能

を分かち、その住み分けをした。人間は動物にあって動物にあらざるべき点だよな」
「？」
「つまり、他の動物は簡単なんだよ。子供を作りたいか否か。違うか？」
「違わない」
「だろ。例えそこに気持ちとか感情とかあったとしてもだ、そいつらは自身を明確に表すことが出来ないわけだな」
「うん」
「それじゃあ、人間は？」
「……言葉がある？」
「それはちょっと曖昧な答えだなぁ。奴らにゃ奴らの言語がある。外国人の言葉を何も知らずに理解するようなもんだ。そりゃ、出来ないだろ？」
「うん」
「俺達にあるのはな、文字なんだよ、文字。こいつのお陰で俺達は全てを記録する事が出来る。記録してるのは、人間だけだ」
「……どうだろ。記録を残すと言う点では、蟻だって記録はしている」
「それが様々な用途に使えてか？」
「いや」
「まあ、そういう談義は置いといてだな。俺が振ったのも悪かったが。要は、お前はそいつと子供作りたいと思うかだ」
「極端すぎると思うけど」
「いいんだよ。結局する事は同じなんだから」
「んー」
「手を繋ぐのだって、キスだって、抱きしめるのだって、結局そこまでの通過点でしかない。もしそこまでいけなければ、そりゃただの勘違いだ」
「う、ん」
「まあ、俺から言えるのはそこまでか。それ以上は自分で考えろ、な」
「わかった」
「手前のケツは手前で拭けって、誰かが言ったわけだが、俺は尻拭き紙を渡しただけだ。あとどう使おうが啓介次第なわけだ」
「うん、ありがとう」

「ああ、あと」
「うん？」
「絶対後悔するなよ。それだけはみっともねぇから」
「……わかった」

そこで僕は頷いたわけだ。
答えはまだ、出てない。いや、逃げているのだからそれはそれで僕の答えなのかもしれない。
ノートに書き付けるペンを止めた。
それは、それで。
……許せるわけじゃない。
どうしてそう思ったのか。どうしてそう思えたのか。それはやっぱり、僕の中で明確に答えが出せるものではない。
だからと言って、それを数式のように強引に出すこともない。
だから、そう。ただなんとなくだ。
「……直井さんはさ」
「へっ？」
「直井さんは、さ。どこ受けるの？」
「え、えっと」
慌てふためく。急に話が振られたこともあるだろう。けど、僕から離しかけられた事が一番大きいはずだ。
「その、T大なんだけど」
「……ああ、なるほど」
僕が受ける国立とは割と近かい。というか、T大学ということは。
「あれ、俺と一緒か」
「はぁ？　コーヘイと一緒、なの？」
「そこで僕を見られても返答に困るけど、そうだよ」
「まあ、俺の第一志望が受かればの話だけどな」
「あ、千陽もそうだったよね」
「う、うん。私も第一なんだ」

そこで浩平が気を回したのか知らないが、こんな事を言い出した。
「啓介の第一も結構近いしな。下手したらみんなで近くに住むことが出来そうだ」
「ちょっと、私のこと置いてない？」
「だって、お前んとこはちょっと遠いわな」
「そんなことないでしょ」
「隣の県なんて、遠い内に入るもんだろ」
「だけど、県境だから、かなり近いはずなんだけど」
「……ってことは、なんだ。みんな同じ場所に住むこともあり得るのか」
「これはこれで面白いかもね」
最後に一言言って、僕は再び勉強に移った。心なしか、ペンが軽く思えた。
結局その後は話が盛り上がったり、勉強したりで日が沈んだ。駅で浩平と直井さんに別れを告げて帰宅。電車の中で須藤さんとちょっとした問答があった。
「また、どういう風の吹き回し？」
「なんとなくだよ」
「あら、そう」
たったそれだけだった。それだけでも通じる。だから僕も須藤さんも、詳しい事は何一つ口にしなかった。
それを皮切りに、僕等は以前のようにほぼ毎日あの店に通い詰めた。僕はと言うと、本当にどう言う風の吹き回しか、直井さんとの関係を徐々に修復していた。それこそ、昔のように、とは行かなくても、ちょっとした会話をするくらいだった。まるで、僕らが初めて会話をした時のような、そんな感じだった。
それから浩平と直井さんは早くも第一志望が受かり、僕も国立の入試が終えていて、後期がある人より少しだけ長い春休みに入った。
みんな入試が終わったこともあり、僕と浩平はいつものように会って遊んだり、たまに四人でどこか行く事も多くなっていた。
「ん？」
僕は何もする事がないけど、いつもの習慣で早く目を覚まし、手持ちぶたさな時間を過ごしていた。そんな折、携帯が鳴った。流れるメロディーはメールの到着を告げていた。
「こんな時間ってことは、浩平かな？」
朝早くのメールは大抵浩平からだったので、そう思い込んで充電器に嵌め込んでいた携

帯を手に取る。
送信者は、須藤理。訝りつつも本文を表示させる。
「おはろー。朝早くからゴメンね。ちょっと話したい事があるので、いつもの店に、十時ね」
人の予定を完全無視した内容。それも彼女らしいのだが、一番の問題があった。
「間に合うかな」
時刻はそろそろ九時になる。須藤さんの使う駅は始発が多く出るからいいのだけれど、僕のも寄り駅はそうは行かない。慌てて準備をすると、携帯と財布だけをポケットに突っ込んで家を出た。
駅で電車に乗り込むと、すでに九時から十時に変わる所だった。遅れる旨のメールを須藤さんに送った。生憎、座席は全部埋まっていたので、ドアの前に立つことにした。
「遅い」
第一声がそれだった。
「え、でも遅れるってメールしたよ」
喫茶店に着くと、そこには怒った表情の須藤さんがいた。
「男の子が女の子待たせてどうするの？」
「いや、だから事前にメールしたよ」
「そんなこと関係ないのです。私は怒っているのです」
「……だから、僕におごれ、と言いたいの？」
「いやいや、分かっているじゃない」
急に満面の笑みになる。
何を、とは言うのも馬鹿らしくなったので、僕は渋々彼女の分のコーヒー代を持つことに。
「で、話ってなに？」
大方予想がつくのだけれど、一応聞いて見る。
「いやぁ、結局千陽との関係をだね」
「聞きたいってこと？」
「そゆこと」
須藤さんは、こういう時は包み隠すことなく話してくれるので有り難い。
「別に、何でもないと思うけど」

「いやいや、だって、最近になってまた話すようになったわけでしょ」
「うん、それは否定しないけど」
「仲直りしたってこと？」
「仲直りって、元から喧嘩もしてないよ」
僕から離れて行っただけなのだし。
「ふぅん。それじゃ、何で疎遠だったわけ？」
「それは……」
言うべきかどうか迷う。正直、前は言うのが嫌だったわけだが、こうして何度も聞いてくると根負けしそうだ。
「まだ、言えない？」
「そんなわけじゃないよ」
「じゃあ、どうして言ってくれないの？」
「……笑わない？」
「笑い話しようとして？」
今度は真剣な顔になる。
「いや、ごめん」
萎縮した鼠のように、僕はあっさりと謝ってしまった。
「それじゃ、話してよ」
「う……ん」
ぽつりぽつりと僕は自分自身の事を話しだした。いや、話し出したら、それこそ芋蔓のようにどんどん言葉が出てくる。
僕がどんな気持ちか、自分自身で分からない事。
そんな状態であの関係を続けていくのは嫌になった事。
結局、離れてもなにも分からなかったこと。
「……なるほどねぇ。なるほど」
うんうんと頷く須藤さん。
「……それで、今に至るわけ」
「ははーん。よーく分かったわ」
「まあ、簡単に言えば、馬鹿なのね」
「酷いなぁ」

「だって、そうでしょうが。それを言わずに千陽から遠ざかったわけでしょ？」
「うん」
「だったら馬鹿。大馬鹿。理由もなく離れなれたら、誰だって気まずくなるわよ」
「そう、かな」
「例えば、コーヘイがさ、ケースケに何も言わずに離れて行ったらどう思う？」
「別に。だって、それは浩平の自由だし」
「……あー、もう！　本当に馬鹿なんだから」
「馬鹿馬鹿言わないでよ」
「救いようないくらい馬鹿なんだからしかたないでしょうが。ちょっと、ケースケ。あんた今どれくらい友達いるわけ？」
「須藤さんが知る限りの人だよ」
僕には友達が殆どいない。それはいずれの時代もそうだ。
「えっと、コーヘイ、私、千陽？」
「当たり」
「当たりって、他にいないの？　確かにコーヘイとずっと一緒にいるから高校では出来ないのは分かるけど、中学時代の人とか」
「それはないなぁ」
「悲しいね」
「そうでもないけど」
「馬鹿」
「だから、そう何度も馬鹿馬鹿言わないでよ」
「あー、ケースケってさ、友達いらないと思ってる？」
「いらないとは思わないけど、それほど必要とは思わない、かな」
「あーあー、はいはい。なるほどね。よーく分かったわ。ケースケ、アンタ人付き合いしてなさ過ぎ」
「うん」
「だから、人の心とか分からないんだわ」
須藤さんはがっくりと肩を落とした。
「言うは易し、行うは難し。百聞は一見にしかず」
ぶつぶつと呟きながら須藤さんは立ち上がった。

「さ、外出るよ」
「いいけど、どこへ？」
「教えなーい」
明るく言って、彼女は外に出て行ってしまった。僕は勘定を手早く済ませて彼女の後を追った。
「それじゃ、着いてきて」
「うん」
先頭に立った須藤さんは迷いなく進む。どうやら駅前に向かっているみたいだ。
「はぁ、なんでこんなことしなくちゃいけないのかなぁ」
「？　須藤さん、何か言った？」
「独り言」
「そう」
駅前かと思っていたが、駅に入り、そのまま電車に。いつもの、僕達が帰りに使う電車だ。
「あ、ここね」
「うん」
言われた駅で降りる。良く見れば、それはいつも須藤さんが降りる駅だった。
「どこに向かうの？」
「黙って着いて来ればいいの」
「わかった」
言われたとおり、改札を抜け、住宅地に。そのまま進み、一軒の家の前で止まった。
「ここは？」
表札に須藤と刻まれていた。
「私の家。さ、入って」
須藤さんは鍵を開けてさっさと家の中に消えてしまった。慌てて後に続く。
「お邪魔しまーす」
「はいはい、いらっしゃい」
おざなりに須藤さんが返事をして玄関から見える階段を登って行った。
「はい、ここね」
一つの部屋に入る。

「……須藤さんの部屋？」
「それ以外の部屋に入れるとでも？」
「そ、そうだね」
「ということで、ちょいと待ってね」
「う、うん」
僕は、床に置かれていたクッションに勝手に座る。須藤さんはというと、昼前の明るい日差しが入り込むこの時間帯に関わらず、部屋のカーテンを閉め切ってしまった。
薄暗くなる空間。急な変化で、目がついていけない。
「それで、どうしてここに？」
「簡単な事なのよね。分からないなら知るしかないわけ。これは分かる？」
「うん、分かるけど、暗いよ」
「それでいいのよ」
薄ぼんやりと霞む視界の中で、須藤さんが動く。
「それでいいって、どうして？」
「どうして？　こうするから、としか答えられないわ」
がばっと音がしそうな勢いで須藤さんが自身の衣服を脱ぎ去った。
「え、ちょ、な、何？」
思わず背を向けて視界から彼女を外す。いきなり脱ぎだして、部屋が暗くて……って、まさか。
「ん？　どうしたの？　背を向けちゃったりして」
「えっと、どうしてって、そりゃ……恥ずかしいし」
「あら、そう」
言いながら、再び衣擦れの音が耳に届く。
「ほらほら、こっち向いて」
「や、やだって」
「恥ずかしがることじゃないしさ」
「恥ずかしいって。それに、その、須藤さんは平気なの？」
「平気かって、そりゃ平気なわけじゃないよ。伊達や酔狂で脱いでいるわけじゃないんだからさ」
「じゃじゃ、なんで脱ぐのかな」

「それは……こうするために？」
不可解な疑問符の後、ふわっと甘い香りが鼻腔を通り抜ける。そして、背中に伝わる人肌のぬくもり。右肩には彼女の顎が乗ってるのが分かる。両腕を拘束するかのように回された両腕。
どくりどくりと心臓が強く鼓動を刻む。何も音がないこの部屋では、煩い位に。
「え、え、え」
ただただ慌てることしか出来ない。なにがどうなってこうなったのか、一切合切分からない。
「ねぇ、こういうの初めて？」
「そそ、そういう問題じゃないから、離れてよ」
「なんでさ？」
「なんでって、なんでも。なんでもいいから離れてっ」
「甲斐性ないわねぇ。据え膳食わぬは、って言うでしょ」
「言うけど、僕にはいらないから。毒を食らわば皿までと言っても、まずは毒を食べないことが第一だから」
もう、何を言ってるのか分からない。慌てすぎて動けないくらいだ。
「毒って、私毒なわけ？」
「とと、とにかく、離れて」
「いーやーだー。というか、ケースケも脱いじゃいなよ」
「脱ぐって、うわっ」
僕の答えを聞かずに、須藤さんは僕の服を脱がしにかかる。シャツのボタンを外され、袖から腕を抜かれ、Tシャツも脱がされてしまった。
「うーん、肉付きが悪いなぁ。もうちょっと筋肉付けたほうがいいよ」
「そ、そんな問題じゃないでしょ。服返してよ」
「い、や、だ。さてさて、下半身に行きましょうか」
「ちょ、それだけは……」
彼女の腕を掴もうとするが、それをするりと抜けてベルトのバックルに手が掛かる。
「うわ、それだけは」
「残念」
するりとベルトが引き抜かれた。

「うわぁ！」
ズボンに手が掛かったところでやっと彼女の腕を捕らえた。
「痛っ」
「……ねえ、どうしてこんな事を？」
「ふむふむ、まず力緩めてくれないかなぁ」
「それは、無理。まず話してくれないと」
「簡単じゃない。ただ、男と女がする事をしようとしているだけでしょ」
「だ、だから、なんで？」
「なんでって、するのに理由が必要？」
「必要だよ」
「そうだねぇ、強いて言えば、ケースケとしたくなったから、かな」
「そ、それだけ？」
「それだけって、するのにしたいという理由はもっともじゃない？」
「それはそう、だけど」
「だったら問題ないじゃない」
「それじゃ、僕に拒否権はないの？」
「拒否権って、私が嫌いなの？」
「そりゃ、嫌いなわけじゃないけど」
「だったら、問題ないじゃない」
再度掴んだ両手に力が掛かる。
「だから、ちょっと待ってって」
「なにさ」
「それと、これとは、別問題、でしょ」
「別も何もないでしょ。要はするかしないかなわけだし、するか出来ないかで、するかそれとも拒絶するしかでしかないんだよ」
「だ、だから、まず待ってって」
「待ったら何が出来るの？」
「出来るとか、そんなんじゃないでしょ」
「なに？」
「だから、その……」

言葉に詰まる。確かに彼女のいい分は分からないものでもない。結局物事はやるかやらないかで動き、やりたいかやりたくないかがその動機となる。その上に理由と言うものが乗っかるわけだ。

ということは、僕がやりたくないという動機にもなにか理由があるはずだ。

「ん？　言えることないって事はするってことだよね」

「いやいや、ちょっと待って。五分、いや、三分でいいから」

「だめ、待てない」

ぎゅっと力が篭る。僕はそれが動かないようにするので精一杯だ。

「……なんというかさ」

「うん」

「やっぱり、ダメ。須藤さんとは、無理」

「どうして」

「どうしてって、そりゃ何でか分からないけど、でも、ダメ」

「拒絶するの？」

「……うん、そうだね。これは拒絶だよ」

「どうして、さ」

「どうしても、こうしてもなくて、多分、僕は、須藤さんを友達だと思ってるから」

僕が言うと、言い知れぬ沈黙が訪れた。でも、それはしばらくすると変わってしまった。

僕の背中で須藤さんが小刻みに震えているのが分かる。

「……く、うっく……ぷ」

「す、須藤さん？」

「ぷ、はははははは、あっはっはっはっはっはー」

何事かと思いきや、彼女は大きな声で笑った。

「いや、うん、そうだわな。あはははは。うん、ありがとう。それだけで十分だわ」

「な、どうしたの？」

「いや、アンタは自分で分かったわけよ。それこそマンガやドラマみたいな台詞だけどね」

「？」

「『友達だから』その言葉だけでいいわ。あ、ちょっとそのままでいてくれる？」

「う、うん」

頷くと背中から須藤さんが離れた。するすると再び衣擦れが耳に響く。

「ん、もうこっち向いていいよ」
「う、ん」
なんとなく気まずくて、僕は身体は向けたものの視線だけは須藤さんを捕らえることができない。
「なーにしゅんとしてるの？」
「え、いや、だって」
「ほんと、ケースケって良く分からないなぁ」
僕は須藤さんが分からないよ、とは口にしなかった。
「まあ、これで私の言いたい事は終了。何か質問感想は？」
「なんで、こんな事を？」
「雉も鳴かずば撃たれまい、と昔の人は言ったわけよ」
「……良く、分からないよ」
「ま、追々気付くでしょ。ああ、そうそう。それとケースケに渡したい物があってね……」

さて、どうしてここにいるのだろうか。と、自問。
さて、その答えは、知らない。と、自答。
「何やってるんだか……」
一人ごちる。本当に、何でだかここに来てしまったのか。
あまり行く事のない駅前で、一人立つ。繁華街があるこの駅は、学校と反対方向にあるので本当に使わない。最後に来たのは……浩平に連れられたときだろうか。どちらにしろ、記憶がおぼろげになるほどというものだ。
立ち並ぶ背の高いビルに囲まれて、どうしてだか居心地が悪い。普段から見ないせいもあるだろうが、それでもどこか拒絶したい気持ちがある。
まあ、僕は田舎者、と言うことだろうか。
する事もなくただ突っ立っているのは本当に暇でもどかしい。この時間を何かで満たせたら、とは思うがさしてする事がない。喉が渇いているわけでもなく、小腹が空いたわけでもない。携帯を開いたところで、メールを送る相手もいなければ、必要とする情報もない。
脇を見れば、営業のサラリーマンだろうか、タバコを吸っている人がいた。あれはあれで、時間を潰すには持ってこいの物だろう。でも、僕は未成年者だし、そもそも煙草を吸

いたいとは思わない。煙を吸って何がいいのだろうか、と言っては喫煙者の反感を買うだろうか。

仕方なく、人間観察で時間を潰すことにする。規定の時間まで、あと十分もある。早く着きすぎた、とは思うがそれが性分なのだから仕方ない。

そして、観察対象が三人目になったところで待ち人は来た。

「あ、れ」

その人は酷く驚いたような、弱弱しい声を出した。

「……やあ」

どんな挨拶するかで迷って、二文字になった。不甲斐ない事この上ない。

「う、うん。こんにちは」

対して彼女は律儀に挨拶をしてくれる。ああ、そうだ。直井さんはこういう人だったっけ。

「あれ、どうして後藤君が？」

「いや、須藤さんにこれ渡されて」

財布の中で折りたたまれていた紙切れを出す。

「これって、あれ、どうして？」

直井さんも財布の中から僕と同じ紙切れを出した。

「まあ、こういうこと、らしい」

「うう、良く分からないよ」

「変な気、回されたわけ」

「う、うん。でも、私、ここにいるのが理ちゃんだと思ってたのに」

どうやら、サプライズだったらしい。僕はと言えば、これを渡された昨日の内に集合場所と時間だけが書かれたメールを受け取っていた。これまでの経緯を考えれば、自ずとどんな事になってるのかは想像が付く。

「ま、行ってみようか」

「うん、もったいないし、それに」

「行かなきゃ須藤さん、怒るしね」

「そうだね」

僕達は歩き出した。お互いの財布にお互いの映画のチケットを仕舞って。

あの時のように自然じゃないし、何処となく溝を感じつつも。その距離は僕自身が生み

出したのだから。だから、その溝を埋めるのも僕でなければならない。
そんな気がした。
「やっぱり、上映時間まで結構あるね」
映画館、と言ってもアーケードの一角にあるような映画館だ。上映プログラムを前に二人で立ち尽くしていた。
「うーん、どうする？」
「折角ここまで来たし……ちょっと買い物したいな」
「うん」
これは、デートではない。ただの、友達同士の遊びだ。例えば、歩いていても半歩分開いた距離とか、常に僕の一方後ろを歩くこととか。そんなことで分かってしまう。
僕らの会話が戻ったところで、それはなんら縮むことは、ない。
「あ、そろそろ時間だ」
「え？」
「ほら、もうすぐ入場開始時刻になる」
「本当だ」
突きつけた携帯の画面で現状を把握する。
「それじゃ、行こうか」
「うん」
僕らはやっぱり変わる事のない距離のまま映画館を目指した。
僕らが観るのは何の変哲もない恋愛映画。これ以上ないくらいに退屈な映画だ。一人の男と女が出会って、恋に落ちて、障害が出来て、それを乗り越えて、最後に結ばれて大団円。
内容は多少違いが生じるだろうが、大方の恋愛映画の構図はそうだ。結局、最後まで観ても、それはこの枠組みから外れる事のない、非常に教科書どおりの内容だった。
世間ではそれを純愛とか言うのだろう。だが、一体その定義が何処から出てくるのが疑問で仕方ない。
それは僕が全くの恋愛経験をしていないからか、それとも捻くれているのか。どちらにしろ、僕は上映中に欠伸を噛み殺すので精一杯だった。
「うーん」
映画館から出て大きな伸びを一つ。ずっと座り続けていたので筋肉が堅くなっている。

一歩後ろを見れば、直井さんも同じように腕を伸ばしていた。
「ねぇ、後藤君はどうだった？」
「映画？」
「うん」
「僕は……」
正直に答えようか迷う。が、嘘を吐くのは苦手なので結局素直に感想を口にした。
「つまらなかった、かな」
「やっぱり？」
「って言うと、直井さんも？」
「うん、なんかね、やっぱりああ言うのはつまらないかなぁ。私女の子なのに笑っちゃうよね。恋愛映画がつまらないって」
「いいんじゃない？　感じ方は人それぞれだし」
脇から出てくるカップルの女のほうが薄ら涙を浮かべながらこちらを睨むのが見えた。
まあ、関係ないことだ。
「あれで泣ける理由が分からないんだよね、僕」
「うんうん。どうしてあれが泣ける映画なんだろうね」
観客の約半分ほどが泣いた映画の後で、明るくつまらなかったと言い合う僕らはさぞ異端だろう。先ほどの女以外にも突き刺さる視線をいくつも感じた。
「まあ、あれならドキュメンタリーの方がよっぽど泣けるし」
「分かる分かる。でも、私はどちらかと言うとコメディーの方がいいかなぁ。映画館まで来て泣きたいとは思わないし」
「ああ、それは分かるなぁ」
「泣ける、と言うのを前面に出してるのも考え物だよね」
「泣けると感動はイコールで繋がるわけじゃないからね」
「理ちゃんに悪いけど、退屈な二時間だったー」
「まぁ、幸い昼過ぎだし、何か食べてからどこか行く？」
「そうしよ」
僕らは、黙っていた二時間分の会話を取り戻すように、矢継ぎ早に話をしながら映画館を出た。
適当な店で少し遅めの昼食を摂っていざ繁華街へ。と言っても、僕は繁華街に来る事は

殆どなかったし、直井さんも同様な様で、二人して観光気分で繁華街を歩き通した。
通りに沿ったアーケードや、駅前に立つ大手デパート、駅ビルを回ったが、これと言って面白い物を見つける事は出来なかった。しかし、何かを見つけては一喜一憂する直井さんを見てるのはなかなか面白かった。
日が大分傾いてきたけど、まだ夕暮れには早い。駅ビルを出たところで行くところを見失った僕達は、その足が自然と駅構内へと向いていた。
「殆ど見て回っちゃったね」
「そうだね」
「これからどうしよっか。って、私は歩き続けてたし、腰を落ち着けたいな」
「同感。それじゃ適当な店に入ろうか」
「うん」
そうして始めた喫茶店巡りだったが、僕は休日を甘く見ていた。人の集まる繁華街、骨を休めるにはとてもいい時間、と言うことでどこの店も殆ど満員状態だった。
「運を天に見放されてるような気がする……」
「ま、まあ座れたから、ね」
結局僕達は駅前プロムナードに設置されていたベンチで休憩を取っていた。
回りを見ても人人人。窒息しそうな街だ。運よく空いていたベンチがあったものの、その他は全部埋まっているという状況。見ているだけで疲れそうだ。
「今気付いたんだけど」
「うん？」
「僕って、こういう人込み苦手みたい」
「私も分かるよ」
「なんか、違うのかな。こう、いっぱいいる人を見てると、どうして自分がここにいるのか分からなくなる」
「どういうこと？」
「なんて言ったらいいのかな。みんな何がしか理由があって、ここに来るわけでしょ。そう思うと、僕がここにいるのが異端分子の様に思えてきて」
「その言い方だと、まるで後藤君が理由もなくここに来てるように聞こえるんだけど」
「まあ、否定はしないけど。気が付いたらここにいた、って感じで、何か理由が見つからなくて」

「理ちゃんに言われたからじゃ？」
「うーん、それは弱いんだよね。結局さ、言われたからって、するしないの選択権は僕にあるわけでしょ。だから、どうして僕はここに来ようって思ったのかなって」
「うーん、まあ、大丈夫、だと思うよ」
「どうして？」
「結局ね、後藤君は来てるわけで、それに理由なんて必要ないと思うけど」
「なんかそれって、本能みたいな言い方だね」
「どうあれ、後藤君の身体はここに来ようとして来てるわけ。それに理由は後からいくらでも付けられるって誰かが言ってたよ」
「でも、なんかそういうの、気持ち悪いなぁ」
「後藤君は完璧主義者か潔癖症？」
「んー、違う、と思う」
「曖昧だね」
「自分の事が一番分かってないのが自分、なんて言葉もあるわけで、急にそれを思い出した」
「うん」
「あー、言っておいて自己完結してた」
「もしかして、私、必要なかった？」
「いやいや、考える材料貰ったし、言い方悪いけど、十分役に立ったよ」
「ありがと」
「ま、これも思春期に起きる典型的なものかな」
「……後藤君って、たまに同い年なのか分からなくなるよ」
「育ちが普通の人とはちょっと違うだけだよ」
「どういうこと？」
「あれ、昔話さなかった……かな。僕が一人の友達もいないで高校まできたって話」
「聞いたことなかったけど、うん、そう言えばそうだね。高校でも友達って言ったら、浩平君くらいだもんね」
「それが、人生初めての友達だなんて、人生のレール踏み外してる気がする」
「……ま、まあ、人それぞれだよ」
「結局論点というか、話が飛びすぎたかな」

「うん？　私は別にいいと思うけど」
「そう？」
「結局、話なんてそんなものだよ」
「そうかな」
「そういうものだって。順序立てて話すなんて、議論じゃないんだから」
「う、ん」
どこか釈然としないが、頷いた。やっぱり、筋道立てて話すのがいいのではないだろうか。それが会話として有るべき姿なのではないだろうか。
そうは思っても、何故か口に出来ない。
「日が暮れ始めたね……帰ろうか？」
「うん」
ただ、僕は頷いて、彼女の後ろを歩いた。三歩後ろから見つめる彼女の背中は新鮮で、それでも形容詞難い不安感を僕に募らせた。手を伸ばしても届かない距離。たったの三歩が果てしなく感じられた。
ああ、僕から歩み寄らなければ。そう思っていたのに。僕の歩幅は変わる事はなかった。半人分空けた座る座席。子守唄を奏でるように揺れる電車の中。斜陽が眩しくて、窓から目を逸らす。
なんら興味を誘うことのない中吊り広告。文字を目で追ったところで意味はない。それを理解するところまで、僕の思考は使われていないのだから。
聞きなれた車内放送を聴いて立ち上がる。
「あれ、後藤君？」
「ん、ちょっと寄りたいところが出来た」
「あ、待って。私も行く」
直井さんの声を背中で受け止めつつ、僕は開かれるであろうドアの前でその時を待った。
「寄るところって、いつものお店でしょ？」
「うん」
僕はいつもの駅、いつもの道を辿る。何時か二人で通った道。いつしか、二人で通らなくなった道。
誰かいるかと思ったが、店はがらんどうで、マスターがコーヒードリッパーを掃除していた。

「いらっしゃいませ」
僕だと確認するや否や、無言で掃除したてのドリッパーを稼動させる。まったく、マスターには感謝するばかりだ。
「いつもの席でいいかな」
「ええ」
客がいないのだから、聞く事もないのだが一応聞いておいた。路地に面したこの店には茜刺す太陽はその光を間接的に届けるばかりで、若干ちらつく蛍光灯が天井から店内を照らしていた。
「あ、私もいつもので」
「ええ」
直井さんは遅れて注文してから、僕の対面に座る。懐かしい配置だった。
「やっぱり、ここが一番落ち着くよね」
「うん、そうだね」
それだけ返して、後は無言。僕らは人通りの少ない通りをただ見つめるだけだった。
「……」
それからしばらくして、マスターは注文の品をテーブルに置いてからカウンターの奥へと引っ込んでしまった。
「ここのコーヒーの味って、変わらないね」
「そう、だね」
僕は返事をすることしか出来ない。
ああ、本当に分からない。どうしてここに着たのか。どうして返事だけしか出来ないのか。息が詰まるようだ。
「ね、後藤君」
ちらりとマスターを見やり、それから彼女は静かに話しだした。
「どうして、こうなっちゃったのかなぁ」
明るく言ってるのに、その顔を直視する事が出来ない。多分、彼女は、悲しい顔をしてると思うから。
「……うん」
ただ、頷いて、カップを揺らすことしか出来ない。本当に、不甲斐ない。
「私がダメだったのかな」

「……」
そんな事ない。心の中で言う。
「分からない事って、こんなに苦しいんだね」
同感。もう、僕は何もかもが分からない。どうしてこんな事になってるのかとか、どうしてこうしているのかとか、どうしてここにいるのかとか。
本当、分からない事だらけだ。
「何も、言ってくれないんだね」
それきり、彼女は黙ってコーヒーを啜り始めた。
僕はと言えば、息苦しくて飲む事も出来ず、ただ黒い水を回すだけだった。
日が沈み、夜の帳が落ちて、暗闇が世界を支配する。店内の明かりは蛍光灯と、所々に置かれたインテリアランプだけだ。
僕達はやっぱり無言で、直井さんはカップの中が空になっても窓の外を見続けていた。
待ってる、そう分かっていても言葉は出てこない。何か言わなければ、と思うも何故か思い出すのは昔の事ばかりだ。
例えば、彼女が初めてここに来た時の事、ここに通い始めた事、何でもない会話もしないでただ外を見ていたときの事。
ああ、そうか。今の状況と変わらないのか。ただ、彼女が僕の言葉を待っている以外は。
浩平は子供が欲しいかどうかと言った。
須藤さんは抱けるか否かと言った。
直井さんは、本能と言った。
三人の言わんとする事は結局一緒で、どれも僕の経験のなさが原因だ。
僕に友達がいなかったこと。恋愛経験どころか、人を好きになると言うことがなかったこと。
自分で考えろと浩平は言った。
友達だから、という答えで須藤さんは納得した。
彼女は……なんて言ったのか。
「うん。でもね、こう思ったの。出来たら本気、出来なかったらそうじゃないって」
ああ、そう言うことか。

「手を繋ぐのだって、キスだって、抱きしめるのだって、結局そこまでの通過点でしかない。もしそこまでいけなければ、そりゃただの勘違いだ」

それはそうだ。

「『友達だから』その言葉だけでいいわ」

ああ、もう。

こんな不甲斐ない僕のために出来る限りの事をしてくれた、僕が愛すべき馬鹿達に感謝だな。本当、手段を選ばない辺り。

そしてそうでもしない限り気付かない僕は大馬鹿だったのか。

「考えたら」

必要なのは最初の一言。

目の前の人は教えてくれた。

「僕は何も知らなかったんだ」

茶色い髪の毛の悪友は極論を言ってくれた。

「友達とか、恋人とか」

悪戯な笑みが似合う友人が教えてくれた。

「だから、これから言うことが間違っているかもしれないし、直井さんを傷つけるかもしれない」

「うん。いいよ」

寛大な言葉。本当、僕は良い人に巡り会い過ぎたのかもしれない。だから気付けなかったのかもしれない。

それは、ただの逃避なのだけれど。

「正直に言って、僕はやっぱり君が好きかどうかは、分からない」

「うん。告白した日に言ったね」

「『これから好きになる事は出来る』なんて言ったけど、その好きなんて感情が一切分からない」

「うん」
「答えが出ないまま、直井さんと一緒に居るのが嫌になった。好きなんていう感情が分からないまま一緒にいるのが苦痛になった」
「どうして？」
「なんか、嘘を付いているような気がして」
「だったら、そう言ってくれればいいのに」
「うん。そうだったね。けど、僕は離れる事で嘘を付く事から逃れようとした」
「そう、だったんだ」
「だから、ごめん」
「どうして謝るの？」
「どうしてかな。謝りたくなった」
「そうなんだ」
「……怒らないの？」
「どうして？」
「結局、自分のために直井さんから離れて、それでも今こうしているから」
「それが、怒る事なの？」
「……さあ。僕はこういう経験も知識も一切ないから分からない」
「そっか。じゃあ、覚えておいて」
「うん？」
「後藤君が話してくれるのを、ずっと待っていた馬鹿な女がここにいる事を」
「……敵わないな」
「言ったでしょ。私達は似ているって。きっと、私から離れたとしても、後藤君は怒ることなく待ってくれると思う」
「……どうだろうね。でも、そんな気がする」
「でしょ。だから、いいの」
「うん、ありがとう」
「また、どうして感謝されるの」
「僕の言葉を待ってくれた事と、許してくれることを」
「うーん、感謝されること、かな」
「とりあえず、言いたかったから」

「そっか。うん」
「まあ、そう言うわけで」
「ね、後藤君」
「な、なに？」
「私のことどう思う、って聞いたら卑怯かな」
「……ううん」
「じゃあ、答えて」
「えっと……」

「告白できないっていうことは、それまでの気持ち。明確な一線があるってこと。自分の感情が、その一線を越えられるか。それも告白の一つじゃない？」

ああ、本当に自分で言っておいてなんだけど、分からない。けど、まあ、言わなければ始まらない事だってある。
「なんなんだろ」
結局、分からない。
自分の気持ちなんて、分かるわけがない。分からないから、こうなっているのだ。
「良く分からないなぁ」
「うーん、私の事嫌い？」
「いやいや、それはありえない」
「それじゃあ、うーん……」
直井さんは考え込んでしまった。
本来は僕が考えるべき物なのに、と自分を情けなく思う。だが、情けないほど、僕は未熟なのは事実だった。
「……自分で考えて見るよ」
一向に口を閉ざしたままの直井さんを見て言った。
僕は、今まであの二人から気付くための、知るためのきっかけを貰っていたはず。教える事の出来ないものだから。だから、僕は自分自身で気付かないといけない。
それでも、直井さんの言葉をステップにしてしまう。どんなに自分で考えようとしたところで、彼女達の影響力は計り知れない。

結局、そういうものなのだ。

答えはとびっきりシンプル。あの二人は生物学、生理学的に言ってくれた。理屈は分かる。つまるところ、人間はそういう生き物なのだから。

だけど、と頭の中でその接続詞が離れない。僕には心があって、様々な事を考えることが出来るから。

いっそ、機械なら何も考えずに済むのに――つまりは、本能のみで生きていけたら。そうしろとプログラムされて、それを実行することが出来るなら。

こんな簡単な事はない。

ずっと、そんなことを考えると、理性の存在が危うくなる。結局、本能とは何か。理性とは何か。思考は哲学の分野にまで発散する。

表と裏。相反する存在があるから、それが存在すると言う理論。本能が有るなら理性がある。裏を返せば、どちらかがなければもう片方もない。強固に見えつつも、一旦崩れれば跡形もなくなる諸刃の論。

何かで読んだが、人間は中間を考えることが出来る、らしい。

例えば、機械は0と1でしか判断出来ない。善と悪。生と死。勝ちと負け。

ところが、人間は違う。小数があったり、必要悪、半死半生、試合で勝って勝負に負けた。色々な表現がある。

人間がその極端なところに依存しないという、性質の表れだろうか。

……それを考えて何になるのか。僕の気持ちの答えが出るのか。自問しても返事はない。

思考はどんどん発散して、収束を知らない。

中間を認めて、曖昧にするのが人間の特徴。そして、最後にうやむやにする。そう、それが人間のあり方ではないか。

何かに固執しても、結局ほどほどに落ち着いてしまわないだろうか。

人間は感動を覚え、慣れる生き物だ。それは間違いないだろう。

どんなに最上の物を得たところで、その最初の感動は忘れてしまい、慣れてしまう。最後は無感動にその最上を得続ける事になる。

そして、最上よりもそれより下の物が欲しくなってしまう。

僕がどんなに大好きで美味しい物を毎日三食食べ続けたとする。最初は嬉しさしかないだろう。だが、次第にそれに感動を覚えなくなる。

それが、飽きるということだ。

美味しい物に飽きた僕は、きっとそれよりも下の食べ物に手を出す。ああ、こんな味だったと半ば感動交じりにその味を楽しむだろう。

感動に慣れたら飽きてしまう。それが人間のサイクル。

だが、人間には技術がある。現状に慣れてしまったら、更なる高みを目指す。更なる最上を求めて。

もし、僕が料理家だったなら、さらに美味しい物を自作するだろう。それに慣れたら、また更に上を目指す。そうして、人間は発展し続けてきた。

思考がまとまらない。何を考えていたのかと思うほど、かけ離れたところに飛ぶ。

僕は何を考えていたのか。

――直井さんへの気持ちだ。

他人なのか、知人なのか、友人なのか。それともまだ知らない、好きと言う感情なのか。少なくとも、今は他人、知人とは考えられないし、そうとして接している気は全くない。

残るは、友人か、それ以上か。友人と言えば、浩平だ。しかし、今回は同性と言う事で退席願おう。

比較対象になるのは、須藤さんだ。彼女は友達だ。それは紛れもない事実。あっちがどう思うが、僕はそう思っている。昨日自分で言ったばかりなのだから。

対して直井さんはどうだろうか。一時期、恋人ごっこのような事をして、離れて、最近になって話すようになった。

僕はどう思っている？

友人、だろうか。確かに友人以上の気持ちはある。だが、その以上が曲者だ。

僕は自分のビーカーの容量を知らないのだ。どんな量の水を入れたら溢れてしまうのかも知らない。だから、まずそれを知るのがいいかもしれない。

それじゃあ、どうやって容量を計るか。一々計量して水を注ぎ込む、なんて出来ない。僕に計量カップも計りもないのだ。

シンプルに、シンプルに。自分に言い聞かせる。

結局、知りたいのは漏れるか否か。だったら、バケツ一杯の水を入れればいい。それで漏れるか否かが分かる。バケツがなければ、風呂桶でもいい。

とにかく、僕の気持ちを入れなければ始まらない。

比較するなら、同じ状況を準備しなければならない。何か同じ事を行う、行わせる。

ふと、あの二人の顔が過ぎる。全く、このための布石と思えてしまえて仕方がない。自

己矛盾が起こるだろうが、仕方がない。人間はそうやって妥協する面も有るのだから。
あの時は否定したけど、今なら分かる。心の中で茶髪の友人に謝った。悪戯な笑みが似合う友人に謝った。全く、僕は不甲斐ないだらけなようだ。
結局、やることは一つに収束する。
僕は須藤さんを拒絶した。それは、友達だと思ってて、それ以上はないと思っていたからだ。
それなら、直井さんはどうだろう。僕は拒絶するのか、受け入れるのか、それとも喜々として自ら牙を剥くのか。
いや、まず直井さんならあんな状況を造らないだろう。もし、そんなことがあれば、それは直井さんがなにか思い詰めているとしか考えられない。一年も一緒にいなかった僕だけど、確信できる。
それでも、強引に置き換える。
例えば、僕ならどんなことがあればそんな事になるだろうか。僕達は似ている、と彼女が言ったのだ。僕がそうなれば、彼女もなるのだろう。そう推測して思考を加速する。
だが、その加速は意味なく終わった。様々な事を考えた。考えて考えて考えた。頭の中で幾つものパターンを造った。けれど、結局答えは一つだ。
僕がそんなことをするのは、自暴自棄ぐらいだ。
もし、彼女が自暴自棄でそんなことしてきたら、どうだろう。まずは止めさせて、それから話を聞いて、一緒になって考える。多分、それが僕のする行動だろう。
だが、それを逆に須藤さんに当てはめて見る。すると、僕も同じ事をするだろう。いや、した。あの時の須藤さんは、半ば自棄のような気がするのだ。
それでは、直井さんの自棄になってまでする理由で納得したらどうする。須藤さんとなら、確実にしていない。友達だから。そんな事は出来ない。
直井さんはどうだ。納得して、僕は出来るのか。
……出来ないだろうな。出来ることなら、そういう状況ではしたくない。
「……ああ、そうか」
自分で答えが出た瞬間だった。
「答え、出たの？」
窓の外から僕に視線を向ける。時刻を確認していないが、長い時間悩んでいたと思う。
「うん、一応」

答えは出た。ただ、その伝え方に迷う。僕の考えた事、答えに到ったまでの経緯。それは口にするには憚れる内容だ。

「それじゃ、聞かせて」

「……何て言うかな、その……」

「どうしたの？」

「何か、言いにくくて」

「いいよ、簡単で。ＹＥＳかＮＯか」

優しく微笑む。全てを許す聖母のような、そんな優しさだった。

もしくは、全て分かっているような、小さな子供を諭す母親のような優しさだった。

直井さんには敵わない、そう思った瞬間だった。

「答えは、ＹＥＳ」

だから、隠しもテレも恥も外聞も何も関係無く、すっと流れるように言葉が出た。

「そっか……うん、そっか」

直井さんは頬を少しだけ緩ませて二度頷いた。

「ありがとう」

しまりのない顔つきで、お礼を言われた。

終